
機動戦士ガンダム S E E D 可能性を抱く者

傍観者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED 可能性を抱く者

【Zコード】

Z5597Y

【作者名】

傍観者

【あらすじ】

ブームは過ぎたかもしれないけど、書いてみたくなりました。あのムウさんに、弟がいたらと言うのです。今回はハッピーエンドものにしたい。なので、いろいろツッコマジックがあるかもしれませんが、勘弁してください。

すみません。話の内容にてノワールはムウさんが扱うことになりました。

主人公のリオンにはふさわしい機体・・・今は言えませんが、話を読んでいくうちにわかると思うので、そこでお話ししたいと思います。

タイトルを変更いたしました。申し訳ありません。

なんとお気に入り件数が百件に届きました!! これからもがんばっていきます!!

プロローグ

お前は自慢の息子だ。

ちちうえからは、そう何度も言われた。

僕は理由を教えてほしいと何度も言つてみた。だけど、その理由は教えてくれない。ただ僕の事を自慢の息子だと・・・あの愚かな女の息子よりもとても優秀だと・・・

兄さんにも聞いてみた。兄さんも知らないと言つ。多分、本当に知らないんだろう。そんな感じがする。

僕には疑問ばかりだった。なぜ、優しくて、頼りになつて、かつこいいにいさんが、僕より下だって、ちちうえが決めているのか・・・ちちうえとこにさんは仲がよくない。何がどうして、こんなことになつてしまつ?

どうして、仲良くする事が出来ないの?

悲しかつた。悔しかつた。どうすればいいのか分からなかつた。

最後に、ははうえの部屋に逃げ込んだ。もう嫌だ。家族同士が憎み合つのはもつたくさんだ!

ちちうえが僕を探しにまほねの部屋にやつて來た。

ちちうえは、僕とははうえを見て呆然としていた。

「お前もその女を選ぶのか?」

違う！
僕はただ・・・

「違います、ちちうえ！僕はただ、みんなが仲良しになつてほしくて・・・」

「その愚かな女について「くと録な」とにならんぞ!」

「あなた！この子にそんな田を向けないで！ムウもリオンも、あなたの息子なのよー！」

「お前に毒されてしまつたがな。まつたく貴様がいるからムウもだめになつた。そして、リオンも腐らせるか！？」

僕は部屋を飛び出した。ちあうえのあの目がこわかった。

その時、僕は誰かとぶつかった。

「あ、こ、こめんなさい…！」前を見てなくて…・・・・」

「気にする」とはない。だが・・・なぜ、泣いている。」

相手は、ちがうえと同じ金髪で、にいさんよりは年上みたいでした。

「みんなが仲良くしてくれないんだ・・・なんであんなに憎み合う

のかが・・・僕にはわかんない。・・・いやだ、あんなの見たくない
い！！もつたくさんだ！」

僕は人目を気にせず、その人の目の前で泣きはじめた。

「リオンー！」にいたのか。」

にこさんがあくまで駆け付けてきた。

「どうやら、迎えがきたようだな。・・・私はここで失礼するよ。」

彼は、屋敷を去ろうとする。

「おいー？お前・・・どうから屋敷に入ってきたんだ？」

「それには答えられんな。・・・それに私は、危害はもう加える気
はない。・・・してしまったからな。」

え？

そして、突然あらゆる方向から聞こえる爆発音。そして、沸き上がる炎。

「な、なにが・・・起こったのー？」

「貴様！？」

僕といさんは彼に向けるが、炎に気を取られていた隙に姿を消していた。

「リオン！外に出るぞーー！」

「う、うんーー！」

にいさんに言われるがままにただ走る。

屋敷は至るところ爆発と炎であふれていた。

「…………リオン、お前は先に出口。」

「にいさんはどうするのーー？」

「母さんを助けに行く。俺もすぐ行くから待つてろーー！」

ははうえがまだ・・・・・！

でも、

「はやくじるーーー！」

「う、うんーー！」

僕には、どうしようもない。

足手まといでしかない。

僕は、家に伝わる特殊な力……直感的に未来を予知する能力をフルに使い、屋敷から抜け出した。

僕が出る頃には、屋敷は、炎に包まれていた。

だけど、にいさんは生きる。それだけは確信が持てた。

あれ？

ちちうえとははうえは・・・

彼等は助からない。

そんな事はない！！

にいさんは助かるのに・・・

なんで二人は助からないって、言つているんだ？

「みんな・・・」

すべてが焼け落ちていく。

「うそだ・・・」

認めない。そんなこと・・・

予知なんて、ただのまやかしだ・・・

当たるな、当たらないでくれ！！

にいさんの奥の方から見えた。人影は一人・・・にいさんしかいない。

なんで、分かつてしまつんだら。

未来は決められていいのか？

僕はただ、知るしかできないのか？

違う！

「にこさん・・・」

「悪い・・・助けられなかつた。」

にこさんは悲しい顔をしている。

もう一人はいない。

いないんだな・・・

「リオン・・・俺がお前を守るからな。」

にこさんは僕を抱きしめながら誓う。

「だつたら・・・僕だつてにこさんの力になる・・・」

にこさんにだけ、背負わせない。にこさんだつて悲しいはずだ。

「リオン・・・なら、大きくなつたら、期待しようかな。だけど、今は甘えていいんだぞ。」

その言葉で僕は耐え切れず、また泣いてしまつ。

ここさんは変わらず僕を抱きしめている。

でもね、にいさん。

僕だつていつまでも甘えたりしない。いつか、にいさんに恩返しするよ。必ず・・・

そして、時が流れた。

兄はその後、遺産相続についての問題にかたをつけ、程なく地球連合軍に入隊した。

このころはザフトと連合の戦い・・・ナチュラルと『コードイネーター』の戦いと言つてもいい。そんな悲しい戦争が起つていた。

兄はザフトのMS^{モビルスーツ}を次々に倒していった。軍はいつしか、兄さんを『ヒンデュミオンの鷹』と呼ぶようになり、英雄扱いした。

俺は兄さんの勧めで、オープに住むことになった。将来大学は工学系・・・技術全般かな、その道に進むことにした。機械を見るのが好きだつたし、実際知れば知るほど興味が沸いて来るからね。それに、戦争はいずれ絶対に終わる。その時に俺は、宇宙にロボーをいくつも作る。まあ、一人じゃ無理だけど、いつかやつてみたいな。

先のことは分からぬけど、俺は確実に前に進んでいくと思つ。

だから、きっとこの夢も叶つよね。

そう俺は願いたい。

設定（前書き）

主人公設定です。

複数つきついな。

設定

主人公設定

名前 リオン・R・フラガ

年齢 16歳

髪はムウと同じ色で髪型は、ガンダムのグラハムさんに近い。

目の色は青。

身長 173cm

好きなこと

機械いじり、友達

嫌いなこと

理不尽なこと

ムウ・ラ・フラガの弟。小さい頃から直感がよくあたることを嫌っている。性格は頑張り屋で真面目。やるからには手は抜きたくない質。でも戦争は嫌いで、できることなら戦いたくないと考えている。人種の違いについての意識が低く、ヘリオポリスで出会ったキラとは仲が良い。（アスランに次ぐ親密さ。）

ザフトによるガンダム奪取作戦に巻き込まれ、戦闘に参加することに…

ストライクF

Strike Phantom

型式番号 GAT-X105F

全高 17.72m

重量 64.8t

装甲材質フェイズシフト装甲

武装 M2M5 トーデスシュレッケン12.5mm自動近接防御

火器 × 2

各種ストライカーパック武装

M8F-SB1 ビームライフルショーティー × 20 ビームサー

ベル × 2 腰に装備

57mm高エネルギー・ビームライフル

175mmグレネードランチャー

25mmビームガトリング

いずれか一つまで選択可。

GATシリーズのストライクの強化された機体。

本来ストライクも改修される予定ではあったが、戦局の打開が急務な為、一機のみとなつた。

ストライクの武装強化と運動性能の引き上げに成功し、機動性と汎用性は、他の追随を許さない。

設定（後書き）

『 気ままにやつてこきたいけど、はやく進みたい。』

がんばっていきます！

ヘリオポリス（前書き）

前置きが長いけど、勘弁してください。第一話始まりますー！

ヘリオポリス

コズミック・イラ（C・E）15年、万能の天才として世界中から注目されたジョージ・グレンが自分が遺伝子操作された人間であることを告白。同時に製造方法を公開したことでの、世界中で遺伝子操作された新人類「コーディネイター」が誕生した。

各国で遺伝子操作は法律上禁止されたが、子に優れた能力を与えるとする親は減ることはなく、彼らは徐々に増えていった。しかし、遺伝子操作されていない通常の人類「ナチュラル」は彼らの優れた能力に対し嫉妬・恐怖を抱き始めた。迫害を恐れたコーディネイター達は、スペースコロニーで政府「プラント」、軍隊「ザフト（Z・A・F・T・）」を組織した。

C・E・70、プラントと地球側との交渉の席で起こった爆破テロを切っ掛けに、「地球連合」はプラントに宣戦布告。農業用コロニー・ユニウスセブンに核が撃ち込まれ、24万名以上にも及ぶ死者が出た。プラントは核攻撃を封じるため、核分裂を抑止するニコートロンジャマーを地球上に散布。結果、核だけでなく、原子力発電も行えなくなつたことによつて地球上は深刻なエネルギー不足に陥り、飢餓や災害によつて数億人の死者が出た。これにより双方の反感情はピークに達し、戦争は激化した。

NJの影響で通信やレーダーが使用不可能になつたことで、既存の兵器は弱体化。物量で勝る連合の勝利で終わると予想されていた戦争は、プラントが開発した人型機動兵器モビルスーツ（MS）の登場によつて拮抗し、11ヶ月が経過した。

資源衛星コロニー・ヘリオポリス

外は戦争中なのだが、中立と言つこともあつて内部の住民は平和に浸つていた。様々な建築物が立ち並び、人が行き交う大通りの喧騒は止まることは無い。

そう、中立国なのだ。このヘリオポリスは現オープ首長国連邦国家元首である、ウズミ・ナラ・アスハの中立宣言以降、オープは「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない」の武装中立政策を取つてゐるため、ザフト、連合の干渉が基本的に存在しない。

さらにオープは、「コーディネーターへの差別感情が他の連邦国家に比べそれほど強烈ではない。

コーディネーターとナチュラルが仮初だとしても共に手を取り合い平和に暮らしてゐた。戦争など起つてないかのように・・・

だが、戦火はこの地をも飲み込もうとしていた。

あの火災から数年後、リオン・R・フラガはヘリオポリスに渡り、工学系と生命科学系の科目を選択し、勉強にいそしんでいた。彼はクラスの中でも抜きん出た才覚を發揮し、成績は常にトップ、そして誰よりも知識に貪欲な彼は努力を惜しまず、先生方の評価も上々、まさに模範的な優等生である。しかし、彼はその気さくな性格からクラスメートからの人望も厚く、彼らもまた彼によつて成績が引っ張られていった。そんな順風満々な学生生活を送つていた。

そんなある日

「・・・・であるからにして」 E . 70年4月17日、地球連合軍第5、第6艦隊はプラント本国を目指し、月面プラント管理下の資源衛星ヤキン・地より侵攻した。これに対し、プラント管理下の資源衛星ヤキン・ドゥー工付近にて、迎え撃つザフト軍と地球連合軍は交戦を行った。

「・・・・ここまで質問はないか？」

side リオン

世界史といつても、もはや戦争のことしか語つてないな・・・・近年は戦争しかやってないけど・・・

まったく、人種の問題はよくわからないな。・・・同じ人間なはずなのになあ・・・

「・・・・質問がないならば、今日の授業はここまでだ。来週の授業までに第一次ヤキン・ドゥー工での時代背景を客観的な立場から推察し、レポートをまとめてよろしく。以上だ。」

本日最後の授業が終わり、学生たちはそれぞれ荷物をまとめ、退室してゆく。

「・・・・まったく、いやなレポートだよな、戦争なんて・・・お前もそり思つよナリオン?」

俺の隣にいるのは、友人の一人、トル・ケーヒである。彼もコーディネーターとかナチュラルとか関係ないと考えている奴だから話してあまり気分は悪くならない。たまに恋人?であるミリアリア・ハウとの惚氣話を聞かされること以外は好感が持てる。

「そりだな。本当になんてくだらない理由で戦争してんんだか……お前みたいな奴がいるというのにな……」

思わずため息が出てしまつ。

「……とりあえず、みんな。今日は早い時間帯で授業終わったし、久しぶりにみんなでどつか食べに行こうぜ。」

サイ・アーガイルが若干暗いムードになってしまったみんなを気にかけるように言つた。

「そうね。日頃勉強三昧の日々だから、たまには息抜きも必要ね。行きましょー！」

彼の婚約者であるフレイ・アルスターがハスキーな声を出しながら続いてくる。彼女はアルスター家のお嬢様で、典型的なお嬢様タイプというなんというか絵に描いたような人だ。ちょっとコーディネーターに対し、偏見は持つてゐるがキラに対しても友好的だ。

キラはなんか動揺してゐるし、トールも「君はどうする?」とミリアリアに声をかけ、「私も行くわ」「サイ! 僕達もいいか?」

こんな感じで食事メンバーは二名増えた。現在4名。

「そりや人数多いほうがいいだろ? キラとカズイ、リオンはどうするんだ?」

「じゃ、じゃあ僕も行くよ!」

あわててイエスと発言するカズイ……そんなに早く即答していいのだろうか?

「じゃあ僕も参加するよ。ほかのレポートはやり終えたし、今日のレポートも期限まで日があるのでね」

「さりとて名追加。現在6名。どんどん増えてるな、おこ・・・まあいいことだけね。」

「よし、じゃあ俺も参加するよ。ほんと久しぶりだよなあ、じりじりの・・・」

「当然俺も参加だ。」「俺、バスするわ」とかいえねえ・・・だつてさ、6人OKで俺だけNOはまずいだろ? それにここからといふと退屈なことにはならないしな。

「じゃあ行くか」

サイの言葉で、俺たちはある某有名なイタリア料理店に向かう。

「じゃあ、みんなで割り勘にしてよ。」

俺の趣案にフレイが異を唱えた。

「いいわよ。私が持つから。そこは気になくていいわよ」

なんとかブルジョワ発言・・・まああひらの厚意を無碍にはできないし、いいか。

「じゃあ、フレイのおじつなんだね。・・・・・」「おちになるよ

「フレイがそいつなら・・・じやあ、おちになります。」

「右に同じく

「僕もね。」

「私も～」

カズイの目がもううつとしている。おれから食べるものを考えて、うつとりしてこようだ。

「おーい、戻ってこい～カズイ。 うれしいのはわかるが危ない目になつていたぞ。」

「え・・・ええ！？ い、いや違うよー！ 僕はただ食べ物のことを考えていたわけじゃなくて・・」

・・・・バレバレだけど、まあ深くコメントするのよそつか・・・

そんな感じで、サイと愉快な仲間たちほ店へと向かつ。

side out

「そう難しい顔をするな、アデス」

傍らの男に苦笑されて、アデスは更に眉間に皺を深めた。

「は・・・しかし

ここは『ヘリオポリス』から程近い宙域である。
小惑星の影に、2隻の戦艦が待機していた。

ザフトのナスカ級『ヴェサリウス』と、ローラシア級『ガモフ』だ。

アデスは『ヴェサリウス』をまかされる艦長だった。
がつしりした体型で、四角く厳つい顔立ちの彼は、自分の懸念を口にした。

「評議会からの返答を待つてからでも、遅くはなかつたのでは……」

「遅いな」

傍らの男、ラウ・ル・クルーゼは即答した。

この男は風変わりな銀色のマスクで顔の上半分を覆っていた。波打つ金髪、すらりと引き締まつた顔つき、マスクで隠れていない顔の部分は整い、

かなりの美丈夫ではと思わせる。

敵にも味方にも、有能さと容赦ない戦いぶりで知られる、この部隊の長である。

「私の勘がそう告げている」

ラウは手にしていた写真を、ピンと指先ではじいてよこした。

不鮮明な画像だが、そこには巨大な人型にも見える装甲の一部が写つていた。

「地球軍の新型機動兵器、ここで見過しきば、その代価、いずれ我らの命で支払わね

ばならなくなるぞあそこから運び出される前に、奪取する」

その頃、ヘリオポリスの管制塔にはリオンの兄であるムウ・ラ・フラガが待機していた。

「接近中のザフト艦に通告するー貴艦の行動はわが国との条約に大きく違反するものである！ただちに停船されだし！」

ヘリオポリス管制塔にアラームが鳴り響いた。

だが”ヴェサリウス”、ガモフは停船勧告に応える様子はなかつた。そして・・・・

「強力な電波干渉！ザフト艦から発信されていますー。」

とたん、管制塔に冷たい空気が流れる。

その意味するところは一つだった。

「これは、明らかに戦闘行為です！」

「敵は？」

ムウは黒と紫のパイロットスーツに身を包んでいた。

『エンデコミオンの鷹』との異名を取る、地球連合軍のヒースパイロット。

彼の任務は、数人のパイロット候補生をこのコロニーに送り届けることだった。

「2隻だ。ナスカ及びローラシア級。電波妨害直前に、モビルスーツの発進を確認した

「チツ・・・ルークとゲイルはメビウスにて待機。まだ出すなよ」として、格納庫へと走った。

side out

ピィキーン！！

え、この感じはなんだ？ 何かが・・・何かが来るのか？

「どうかしたの？ リオン？」

キラが怪訝そうに尋ねてきた。

「いや・・・なんでもない」

そんな馬鹿な・・・攻めてくる敵なんて今はいないはずだ。しかし、その考えはそのあと覆される事になる。

アークエンジエル艦内

「艦長」

『アーケンジエル』司令ブースの中。

「慌てるな、迂闊に騒げば向こうの思つツボだ。対応はヘリオポリスに任せろー！」

通信に応対する艦長。

「・・・分かつていい、いざとなれば艦は発進せらる」
荒々しく切ると振り向き、ナタルとノイマンに

「フリニアス大尉を呼び寄せ、『G』の搬送を開始させー！ー」と命じた。

「はー！」

工場区のあちこちで爆発が起こそり、轟音と凄まじい揺れが『ヘリオポリス』を襲つた。

爆風に飛ばされる人々、誘爆を引き起こそし、炎上する施設、鉱山内部の岩盤が崩れ、瓦礫が降り注ぐ。

「ロニー 全域に衝撃が走った。

「きやあー？」

「隕石か？」

「な、何ー？」

「いったい何が・・・」

そんな・・・こんな時にあたってほしくなかつた・・・いつたいどこが攻めてきたんだ？

轟音と凄まじい揺れを感じ、その間にも足をすべりょうな振動が襲つてくる。

逃げ惑う人々。呆然と立ち尽くしている俺たちに誰かが駆け寄つてくる。

「逃げるんだ、ザフトに攻撃されているー」ロニーにモビルスーツが入つてきるんだ

よー、君達も早く！！」

ヘリオポリス市民が避難を促す。

皆、一瞬立ちすくんだが、事態がよくつかめないまま、彼らはあとに続いた。

そのとき、金髪の髪に帽子をかぶつた少年が反対方向に駆け出して行つた。

何だあいつ！？ 正氣か！？

「きみ！」

逆方向へ駆けていく彼のあとを、キラは思わず追いかけた。

「おい、待てよキラ！・・・まづいなーサイーみんなで先に行つてくれー！」

そう言つてリオンも追いかける。

「わかつた！ 気をつけろよ。 行こうみんな！」

「う、うん」

「気を付けてね、リオン・・・

「待つてるからな」

「ちよつと・・・」

フレイが呼び止めるが、今は無視だ。・・・なんて馬鹿なことするんだあいつ・・・。とりあえず、会つたら『んこつだな・・・

ザフト艦から発進した3機のジンはヘリオポリスの自衛MAミストラルを蹴散らし、

ヘリオポリスに向かっていた。

MA『メビウス・ゼロ』に搭乗したムウはザフトのMS『ジン』の突入を認め、

艦長に通信した。

「船を出して下さい。港が制圧される。」あらも出るー」

「あれだ・・・クルー、ゼ隊長の言つたとおりだ

冷静な口調で言つたのはイザーク・ジュールだつた。

バイザー越しにも分かる、冷たく整つた顔立ち、まっすぐに切りそろえられたプラチ

ナブロンドがさらにその印象を強めるが、今はヘルメットに隠されている。

「つつけば慌てて巣穴から出でくる・・・つて？」

ディアック・エルスマンがクスクス笑つた。

金髪に浅黒い肌、陽気そうな外見だ。

ヘリオポリス内部に侵入していたザフト軍はいずれもエリートパイロットであること

を示す赤いパイロットスーツを着用していた。

にわから慌しくなつた『モルゲンレー』工場付近の様子を、スコープで見つめていた。

作業服を身に着けた栗色の髪の女性が、視界に入る。彼女が中心となつて指示を出しているようだつた。

背後の開かれたシャッターから、巨大なコンテナを積載したトレーラーが出てくる。

「やっぱり間抜けなモンだな、ナチュラルなんて」イザークが冷たく言い放つと、発信機のボタンを押した。

「落ち着けニコル」

他に聞こえないよアスランは肩膝をついて硬くなつてゐるニコルに他には聞こえないように小さく囁く。

ニコルはざらにちないながらも笑みを返す。

「行くぞ」

アスランを筆頭に移動を開始する。

イザーク、ディアツカ、ラステイ、ニコルもそれに続いた。

「ラミアス大尉。艦との通信途絶。状況不明」

部下より連絡を受けた直後、ザフトの砲撃を受けた。

「ザフトの・・・！ X105とX105F・303を起動させて！」

受身を取つたあと走り出した。

「とにかく工場区から出すわ！！

「分かりました！」

部下があとを追いかけた。

工場区の外では、激しい戦闘が繰り広げられていた。

地球連合君は地対空ミサイルで応戦しようとするが、ミサイルを積んだ装甲車は片端

からザフトのM5ジンに潰されていく。

ザフトの潜入部隊はその間隙をぬって、搬出口へ接近しつつあった。無駄のない動きでトレーラーに取りつきながら、イザーグが指示する。

「運べない部品と工場施設は全て破壊だ。報告では6機ある筈だが・

- ・ あとの3機

はまだ中か?」

工場から出たところ、3台のトレーラーが身動きならなくなっていた。

その荷台にはそれぞれ一体ずつ、明らかにモビルスーツと判る機体が積まれている。

潜入部隊の目的はそれだった。

「オレとラスティの班で行く。イザーグ達はそっちの3機を」
アーサーが叫び、アスラン達に合図する。

「OK、任せよ。各自搭乗したら、すぐに自爆装置を解除
そして、アスランは工場の搬出口を目指した。

side キラ

キラが追いついてその腕を捕らえた。

その時、背後のどこかで爆発が起り、爆風が帽子を吹き飛ばした。

「お・おんな・・・の子?」

キラがぽかんと呟くと、相手は鋭い目でキラを睨んだ。

「・・・なんだと思ってたんだ、今まで

「いや・・・だって・・・」

一瞬氣まずい雰囲気が漂ったが、続けざまに起つた爆発と呼び声
がそれを吹き飛ばす。

「何してゐるんだよ、そつち行つたつて……」

はやく避難しないと……！」

「何でついてくる。そつちひいき早く逃げる！――」

「キラ――」

向ひからリオンが叫びながら走つてくれる。

「リオン！？・・・なんでも？」

「迎えに來たぞ、馬鹿野郎！―― まつたくなんて無茶するんだよ・・・」

・

少女はキラの手を振りほどいた。

「いいから行け！―― 私には確かめねばならぬことがある――」

「行けつたつてど二へ？ もう戻れないよ――」

さつきの爆発で、来た道は無残にも崩れ落ちてゐる。
キラはしばし考え、いきなり少女の手を取つて走り出した。

「ええっと、・・・ま、ま、ま――」

リオンもそれを追つ

少女の皿ひつすりと涙がこじんでいた。

「いんなことになつてはと・・・私は」

「とにかく避難が先だよ！ 工場区に行けば、まだ避難シェルター
が」

キラと少女は通路をたどつて走り、やがてひらけた場所へ出た。
格納庫のようながらんとした空間に突き出て、キャットウォークの
上だった。

階下では銃撃戦の真最中だ。外からは何かが爆発する音も聞こえる。
だが、目に入つたものに、キラ達は思わず足を止めてしまつた。

「これつて・・・」

金属独特の冷たい輝きを放つ、人型の兵器・・・まさかこれは・・・
少女は、よろよろと手すりに寄つた。

「やつぱり・・・」

キラの隣で少女が、がくりと膝をついた。

キャットウォークの手すりを両手でかたく握りしめ、うめくようこ
叫ぶ。

「地球軍の新型機動兵器・・・お父様の裏切り者！
side out

ポカーン？？？？？？

こいつは今、なんと言つた？？ なぜにMSを見て叫んだかはわから
ない。直感で感じた。こいつは・・・単純な奴だと、騒がしい奴
だと。今も騒がしいが・・・

彼女の声は高い天井にはね返り、大きく響いた。

キラは少女を手すりから引き離し、後ろへ飛びのいた。

銃声が響き間一髪のところで、銃弾が手すりを掠めて飛ぶ。

「冗談じゃない！」

キラは少女の手を取つて走る。

「泣いてちゃダメだよ！ ほら、走つて！」

「子供！？・・・どうしてこんな所に・・・」

その時、三人を撃つたマリューは心中で懺悔をしていた。

side out

「ほう、すごいモンじゃないか・・・どうだ、ディアッカ？」

「OK。アップデータ起動、ナープリング再構築、キャリーブレード完了・・・動け

る」

イザークの乗つた『X102デュエル』とディアッカの乗つた『X103バスター』がトレーラーから立ち上がる。

「ニコル！」

イザークが呼びかける。

「待つてください、もう少し」

ニコル・アマルフィーはキーボードを叩いている。

淡い色の巻き毛と大きな目をし、色白で少女めいた顔立ちの彼は15歳。

そしてニコルの乗つた『X207ブリッツ』も立ち上がった。

「アスランヒラステイは？・・・遅いな」

「ふつ、奴らなら大丈夫さ。ともかくこの3機、先に持ち帰る。クルーゼ隊長にお渡しするまで壊すなよ」

ディアッカの言葉を制し、3機は宇宙へと舞い上がった。

side リオン

「ほら、ここに避難している人がいる」

退避シェルターの入り口へたどりついたキラ達は、インターフォン

を押した。

「まだ誰かいるのか？」

スピーカーから応答の声がした。

「はい！僕と友達もお願いします。開けて下さい」

「2人か！？」

「いえ3人です。」

スピーカーからの応答に、一瞬間があいた。

「・・・もうここは一杯なんだ。左ブロックに3フシェルターがあるが、そこまでは

行けんか？」

キラは左側を見たが、廃墟と化していた。

「なら、1人だけでも！ お願いします。女の子なんです！」

まあ順当だらうな・・・

『・・・すまん！わかった！』

ロックを示すランプが赤から青へ変わり、扉が開いた。

「入つて」

虚脱したように黙り込んでいた彼女を強引にシユーターに押し込んだ。

「えつ、・・・私は！」

「いいから入つて！ 僕達は向こうに行くから、大丈夫だから早く！」

ガラスを通して少女の口が「待て！ お前・・・」と動くのが見え
たが、すぐ下層の
シェルターへと運び去られた。

なんというか・・・無鉄砲な奴だつたな・・・真っ先に戦場で死ぬ
タイプかな？

ランプが元通り赤になるのを確認して、キラ達は走り出した。

「『めんね・・・』

「気にするな。俺は気にしない」

side キラ

またもや格納庫のキャットウォークに戻ると、階下では依然戦闘が続いていた。

「ハマナ、ブライアン、早く！ X105、X105F、303を起動させて！」

女の声が格納庫内に響いた。

キラの頭に何か稻妻の様な物が走った。直後、例のモビルスーツの影に身を隠しながらライフルを撃つ、作業服姿の女性に気付く。キラははっとした。

一人のザフト兵が、軍人らしいさつきの女性を背後から狙っている。「危ない、後ろ！」

思わずキラは叫んでいた。

彼女は声に反応して振り返り、敵兵を撃ち殺した。

奥にあつたもう一体のモビルスーツの方から、銃撃の音に混じって怒号と悲鳴が上

がつた。

「来い！」

女性はキラ達に向かつて怒鳴った。

「左ブロックのショルターに行きます！ おかまいなく！」

キラが大声で言うと、彼女はライフルを撃ちながら叫び返した。

「あそこはもう、ドアしかない！」

その言葉にキラ達は足を止めた。
瞬間、後ろで爆発が起こった。

彼らの決断は早かった。

ためらいもなくキャットウォークから身を躍らせた彼の姿に、女性兵士は目を疑つた。

落差5、6メートルはあるだろつ。物柔らかな外見にそぐわぬ敏捷さで、キラ達は猫のようにMSの上に着地した。

驚きに一瞬動きを止めた女性の背後で、モビルスーツを守つて戦っていた男が、1人のザフト兵を打ち倒した。

「ラスティ！・・・くそおつ！」

赤いパイロットスーツのザフト兵が叫び、仲間の命を奪つた男に銃を向ける。

放された銃弾が命中したのか、崩れるよつに男が倒れた。

「ハマナ！」

女性兵士がその名を呼んだ瞬間、ザフト兵は振り向きざまに彼女を撃つた。

「あうっ！」

銃弾が彼女の肩に命中し、血が飛び散る。

キラは思わず駆け寄つた。

ザフト兵は弾詰まりでも起こしたのか、手にしていた銃を捨て、ナイフを抜き放つて

彼女に迫る。

side リオン

まずい！！

女性兵士の近くにはキラガ・・・

「はなれりおおおおおお！…！」

コンバットナイフを持つて突撃するザフト兵を蹴り飛ばす。

「ぐあつ…」

しかし、奴も反撃し、崩された体制からナイフを突き出す。

「うおつ…！」

あわてて避けるけど肉弾戦はこちらに不利かも・・・

「邪魔だ！！」

ナイフを使い、なおも攻撃していくザフト兵。・・・その後ろから
もう一人だと！？

「そこだあ…！」

「やばつ…！」

チャンスとばかりに隙を突くザフト兵。

かろうじて躲せたがバランスを崩し、落下するリオンとザフト兵。

「やばつ…！」

「しねえ…！」

てか落下するときまで攻撃していくのかよ！？ 受け身取れないぞ？

「ぐわっ……？？」

案の定、頭から落ちたザフト兵……一応訓練したんだよな……・？

まあ不可抗力だ、悪く思つな。

とつあえず……どうじょう？ 残つてゐるMSあるかな？

side キラ

「・・・アスラン？」

そんな・・・どうして彼がザフトに？

「・・・キラ？」

声を返したのは誰であろう、ナイフを構えたザフト兵だった。意思の強そうな縁の瞳が、キラの姿を映して見開かれていた。

思つても見なかつた形での再会に、2人は言葉もなく立ちつくす。

その隙をついて、女性兵士が負傷した肩をかばいつつ、銃を構えた。間一髪のところで、それに気付いたアスランは飛びのく。

銃声が響き、さつきまで彼のいた空間を弾が薙いだ。

そしてキラは女に体当たりされ、彼女もろともモビルスーツのコックピットへ転がり

込んだ。

赤いパイロットスーツとクリスが、他のモビルスーツへ向かうのが見えた。

「シートの後ろに！」

女は指示し、モビルスーツの立ち上げにかかりた。

「この機体だけでも……。私にだつて、動かすくらー、……」

……アスラン……？

計器類に光が入り、ブウン…という駆動音が徐々に高まる。モニターが明るくなり、浮かび上がった文字列がキラの目に飛び込んでくる。

・・・Generals

Unilateral

Nero-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver・・・

命を吹き込まれたかのように、モビルスーツの両目に光が灯り、ぴくりとその指が動く。

咄嗟にキラの目は、赤く輝く頭文字を拾い上げていた。

「ガ・・・ン・ダム・・・？」

エンジンが低い唸りを上げ、巨大な四肢がゆっくりと動き始めた。メンテナンスベッドに機体を固定具がバシバシと音を立てて弾け飛んでいく。

どこかぎりのない動作で、それでもモビルスーツは爆炎の中、立ち上がる。

炎が鋼色の装甲に照り映え、聳え立つその威容を紅く照らし出した。

side リオン

まだ、残つていたか！！

俺の視線の先には、まだ空きのMSが存在していた。ザフト兵もない。俺は急いで俺はその機体に乗り込む。

俺は、MSのパワーをオンにし、システムが立ち上がりゆく。計器類に光が入り、駆動音が徐々に高まる。

モニターも次第に明るくなり、浮かび上がった文字列がリオンの目に飛び込んでくる。

- • • Generals
- Unilateral
- Nero-Link
- Dispersive
- Autonomic
- Maneuver • •

そして、機体名称も表示された。

「GATT-X105F • • • ストライクファンтом • • •

運命は、動き出した。

ヘリオポリス（後書き）

ムウさんは感じたようですね。
NTのパクリかもしだいけど、この力が重要になっていきます。
リオンの能力はNT超えてるかもしれない・・・

ガンダム（前書き）

ミゲルさんには、生き残つてもらおうといおもこます。

幸があまりになかつたので・・・

ガンダム

side out

「よくやった、アスラン」「ジンに乗っている金髪のパイロット、ミゲル・アイマンがアスランに言う。

来ているパイロットスースは縁を基調としていて、一般兵だと伺うことが出来た。

クラステイとアルマは失敗だ・・・向こうのMSには地球軍の士官と民間人らしい少年が乗つている・・・」

その言葉を聞いて、ミゲルが目にしたのは、まだたどたどしい動きで着地するもう一機の地球軍の新型MS。それと同時にミゲルは表情に憤りを浮かべた。失敗は、死もある。

「なら、あの機体は俺が捕獲する、お前達はそいつを持って先に離脱しろ」

side キラ

着地したとたん、機体が大きく傾き、キラは倒れないようにシートの背にしがみついた。この人はけがをしてるのに、懸命にあちこちのレバーやスロットルを調整している。モニターには外部カメラを通した映像が刻々と映し出されている。キラはそれを見て啞然とした。通いなれた道筋、日常の風景が、見るも無残に破壊されていた。街路には瓦礫が散らばり、あちこちから黒煙が上がっている。

画面の隅に動く人影を見て、キラは驚愕し、あわてて身を乗り出した。

「サイ！？　トール！　ミリアリア！　カズイ！」

瓦礫の間を縫うように走っていた。

その時、ジンがマガジンを発砲した。

「くっ…」

あわてて彼女はストライクをジンのほうを向き直らせ、フェイズシフト装甲を発動させた。そして弾丸はすべて跳ね返り、ストライクは無傷だった。

そして、ジンはそのまま剣を抜き、ストライクに切りかかる。

ストライクは両腕をクロスさせ、剣を両腕で防ぐ。そこから凄まじい火花が飛び散った。

それはストライクの装甲がジンの剣を削っている証拠だった。

このようなストライクの装甲はフェイズシフトと呼称され、実体弾が全く効かないようになっている。

地球軍のMS、Xナンバーには標準装備されている代物だ。

流石にそれに驚いたのか、ミゲルの顔も驚愕の色を隠せない。

「何い！？」

それにミゲルが驚く。

腕と剣の鍔迫り合いは、ミゲルが一旦剣を引き、後に跳躍したことで終わりを告げた。ストライクを正面に捉えたジンのモノアイが光

り、剣を構えなおす。

「「こつっ…どうなつて…」」いつ装甲は…？」

予想外の出来事に、ミゲルがアスランに怒鳴りつける。しかし、静かに〇△を解析していたアスランは淡々と語り始めた。

「そいつ等は、フェイズシフトの装甲を持つんだ、展開されたらジョンのサーベルなど通用しない」

そう言つてフェイズシフトを開くアスランのイージス。神の盾の名を冠するその機体はセンサーが強化されており、一目でXナンバーの指揮官的位置づけだと窺える。

その色は赤紫色に統一されていて、周囲から浮き立った存在を見せ付けていた。悔しそうに表情を歪ませるミゲルを尻目に見ながら、アスランのイージスは発射された有線ミサイルや、それを運用する車両を頭部のバルカンで撃ち落した。それらは全て、紙屑の様に飛散した。

爆炎が起きた中、ミゲルはアスランに言つた。

「お前達は早く離脱しろ、いつまでもつるづるするな…」

「・・・・・」

アスランはストライクに昔の親友の面影を重ねた。

プラント、地球の緊張状態が続いたとき、月の幼年学校に通っていた二人。

しかし、地球の息がかかった月から避難をするという父親の意思に

当たり、アスランはプラントへと旅立つこととなつた。自分の作った小型の機械のペットを手渡して。

「・・・・・キラ・・・・」

別れの日に見た幼馴染の今にも泣き出しそうな顔が、アスランの脳裏をよぎる。それを振り切るように、アスランは空高く舞い上がり、戦線を離脱した。

飛び立つ機体を田で追っていたマリューは前方にいる敵に注意を怠つていた。先程から鳴り響いているアラートも、耳慣れてしまつたためか、本来の役割を忘れてしまつてゐる。だが、キラは依然として前を見ていた。そして、眼前のジンが剣を振り上げて迫つて來た。

「前！」

キラの声ではつとし前を見るマリュー、モニターいつぱいを覆い尽くすジンの巨体。不安と焦りが入り混じる中、マリューは唯一の飛び道具であるバルカンのトリガーを汗ばんだ手で引絞つた。

搭載されている砲塔システム。

だが、「イーゲルシユテルン」は自動照準をしていないため弾は当たらなかつた。

その余裕のない動作に一つの確証を得るミゲル。小さい嘲笑を上げ、トリガーを握る手に力を込めた。

「ふつ！いくら装甲が良かろうが！……」

ジンの剣が空を裂いた。しかし、体を横に逸らし、間一髪で避けるストライク。そして、ジンは飛んだ反動でもう一度スラスターをふかし、剣を振り下ろした。

ガガアアアアアン！

耳を劈く金属音が振動となつて襲い来る。装甲にダメージは無いと言つても中に入っている人間は別だ。

激しい振動に体を揺さぶられ、声にならない悲鳴を上げる一人。ミゲルはもう一度破壊を試みたのだろう。

「そんな動きで……！」

今一度跳躍し両手で構えた剣を勢い良く振り下ろした。それはストライクの右肩に当たり、後に飛ばされた。そして、ストライクは建築物に突っ込んだ。避難勧告が出されていたため死人が出なかつたのが幸いだらう。

「きやあああ！」

マリューが腕のいたみを堪えきれず、悲鳴を上げた。額を伝う汗は脂汗となり、息は荒くなる。

ルージュを引いた唇も、今では苦痛に歪んでいた。

そんな中、視線追従式のモニター横を見ていたキラは、必死で逃げ延びようとする人々を映すモニターの中に、先程まで一緒にいたサイ達を見つけた。肩で息をしながら、必死に逃げ延びようとするサイ、トール、ミリアリア、カズイ。

「生意気なんだよ！ ナチュラルがMSなど……！」

ミゲルは止めを刺すため後ずさりするストライクを追い詰め、コックピットを突き刺すため剣を引いた。

幾ら対物理衝撃性能のよい装甲でも、中の人間を殺してしまえばた
だの鉄の塊である。

それはコックピットの人間を殺すために、衝撃を「与える」とことであ
つた。

side リオン

なんてめちゃくちゃなOSなんだ・・・一から書き換えないといと・・・

キーボードを打ちながら、俺は思った。これ・・・不良品だろ・・・
正気じやないOS積み込んでるし、使い物にならないだろ・・・
OSの書き換えが終わり、ゆっくりとストライクファンтом（以下
ファントム）で立ち上がる。

ん？ あれは確かキラたちが乗つてた機体だ！ それにあれはジン
か！？

side キラ

「いい加減にしろーー！」

ズガアアアアアー！！！

いつたい何が・・・

突如、側面からの衝撃にジンが倒れこむ。

「ぐおおお？！？」

突然の衝撃にミゲルは驚きシートから引っ張られるような錯覚に叫び声を上げていた。予想だにしていない反撃をくらい、ジンは横に吹っ飛ばされる。そして、ジンは宙を舞い、地に滑り落ちた所には轟音、振動と共に粉塵が舞いあがつた。

マリューとキラがそれを観てみるとそこにはPS装甲を起動させ、胴体部は今まで薄い灰色だつた所がストライクと同じ、否、少し暗いカラーリングとなつた『X-105F、ストライクファンтом』が立つていた。

「はあ、はあ、・・・ここにはまだ人が居るんですよ！？こんなものを組み立てて乗つっているなら、何とかしてくださいよ！…」
僕がやるしかない！！

「・・・どいて下さい！」

キラはこの隙にマリューを押しのけ、シートの横からプログラム入力用のキー・ボードを引き出すとOS等の調整を始めた。

「くつ・・・・！キヤリブレーシヨン取りつつ、ゼロ・モーメント・ポイント及びCP

Gを 再設定・・・チツ！ なら擬似皮質の分子イオンポンプに制御モジュール直結！ ニュートラル・インゲージネット・ワーク再構築！ メタ運動野パラメータ更新！ フィードフォワード制御再起動、伝達関数！ コリオリ偏差修正！ 運動ルーチン接続！ システムオンライン！ ブーストラップ起動！

キーボードを叩くキラの手が更に加速し、OSを書き換えていく。表示されているOSに新たなルーチンを組み込んで、その潜在能力を引き出すための時間。

ナチュラルには難しくても、キラには造作も無い行為だつた。

『SYSTEM UPDATE』

「IJのおおお……」

ジンがゆっくり立ちあがり、中にはいるミゲルは突然の変わりように舌打ちをする。それがマグレであつたとしても、コーディネーターであるプライドを傷つけられたことには代わりが無かつた。

しかし彼は、もう一つの機影に目を向けることを怠つていた。

「キラから離れるお……！」

エンジンを全開にして、腰から抜いたビームサーベルでジンの両腕を切り裂いた。

「なにいい！？？」

ミゲルにしてみれば、想定外の事ばかりが起こつてゐる。たかがナチュラルごときに、MSは扱えない、その油断がリオンの攻撃を許したのだ。

しかし、氣づいたところでもはや手遅れであった。

ファンタムにコックピットをビームサーベルで突きつけられているミゲルにはもはや、自爆か拘束されるの一択しか残されていなかつた。

side out

「IJのつー」

その頃、ムウ・ラ・フラガのゼロは2機のジンを相手に宇宙を駆けていた。有線ガンバレルが展開され、ジンのマシンガンを持った右手を打ち落とす。ムウはそのままリニアガンで剣を持とうとした左手を打ち落とした。だが、先程からジンに翻弄されている友軍のメビウスも、もう一機のジンの剣に切られ、爆発した。

「IJの戦力差では…どうにもならんか！？」

くそ、やばいぞこりゃ…不利なのはかわらない。だが、

「俺は不可能を可能にする男だぞ。」

彼の闘志はまだ燃えていた。

「ミゲル機大破！ シグナル、ロストしました！」

ヴェザリウスのブリッジに驚愕を含んだオペレーターの声が響いた。その声は皆に聞こえ、ブリッジクルー全てが信じられないといった表情を露にしている。

ザフトのMSが、大した戦線でもないのに大破を被るなど、予想だにしていなかつたからであろうか。

それとも、奪取作戦に参加したエリート達の一身上のベテランだったからであろうか。

「ミゲルの機体が大破だと！…たかがこんな作戦で…！」

MSにジン一機を大破させられたことに動搖を隠しきれないアデス。敵側に『エンディミオンの鷹』と言うエースパイロットがいるとは

思わなかつたのだらう、その額には汗が浮かんでゐる。

「ふむ・・・ゼロからか五円蟻に蟻が一匹飛びまわつてゐる
みうだな・・・」

シートにひこて悠々と戦局を見守つていたクルーゼが苦々しく呻き、
ゼロの表示されたモニターを極めしく睨んだ。ギリッと歯み締めた
歯、マスクをしていても普段の余裕の在る雰囲気が消え去つてゐる。

「は？」

「蟻を落としてくる、私のシグーを用意しろー」

聞こ返すアーティスに、強い口調で命令を下すクルーゼ。苛立たしげな
その言葉を、彼自らが出撃するのだと解釈するまで、アーティスは少々
の時間を要した。

「ミゲルを倒すとせな・・・それほどまでに動いていとなれば・・
・」

言葉尻に少々怒氣が含まれてゐる。

そして、クルーゼはシートから立ち上がり、モニターを背に歩き出
した。

仮面の下には、喜びとも、恐怖ともつかない表情を浮かべて。

「最後の一機・・・そのままこなしておけん」

クルーゼは苦々しい表情をそのままに、ブリッジを後にした。

同じ頃シャフトの一角、爆発に巻き込まれたナタル・バジルール少尉は死人からぶつかられる事によつて起こされた。彼女は先程、爆発が起る前『アークエンジェル』と言う船を出て、外にいるはずのマリュー・ラミアス大尉を呼び戻すためにシャフト経由の移動ベルトでコロニーに入ろうとしていた。

しかし、その狭い空間、シャフトの中に爆発の余波、爆風が黒煙を伴い凄まじい勢いで叩きつけたのだ。

とつさに頭部を庇い、身を丸くしたナタルは運良く難を逃れたが、目の前にいる死人はそもそも行かなかつたようだ。死人は大量の血を流しており、当たり前だが息はない。押し寄せる不快感に口を押さえながらも、彼女は使命を忘れなかつた。

「・・・艦は・・・アークエンジェルは...!？」

先程まで共同の職場にいた者達は既に事切れており、その場で生きているのはナタルだけだつた。ナタルは船の安否を確かめるため、シャフトを後にした。

外では、Gのパイロットを運ぶために使われた輸送船が港から出で応戦中だつた。しかし、ジンからエンジンに直撃を受け、呆氣無くヘリオポリスの外壁に接触し、爆発、飛散した。

コロニーの崩壊がさらに加速してゆく。

side out

宇宙空間に緑、青、赤の撤退信号が照り、ジンは引き上げを始めた。

「引き上げる・・・だが、まだ何か・・・これは!？」

その中途半端な行動に、ムウ・ラ・フラガは疑問の声を上げる。損傷しているとはいえ、MSの戦闘能力には自走砲などで太刀打ちできない。一機でもコロニー制圧し蹂躪することが可能なはずである。何かに気づいたように踵を返しコロニーの方向に戻るムウ。

時を同じくしてクルーゼもMS『シグー』を駆り宇宙空間を疾走していた。ノーマルスーツを着ないことから、絶対勝利への自信が強く、それほどまでの腕前が察せる。

「私がお前を感じるように……お前も私を感じるのか？」

喜びとも、苦渋ともつかないその言葉には言葉では言い表せないほどの因果が含まれていた。

「不幸な宿縁だな……ムウ・ラ・フラガ……！」

クルーゼの顔には、複雑な表情を無理やりにでも隠す銀色のマスクが鈍く光っていた。

シグーの接近をいち早く感知したムウはライフルの狙撃をかわしガンバレルを展開し四方からラウ機を狙った。

「お前はいつでも邪魔だな、ムウ・ラ・フラガ！ もつともお前にも私がご同様かな！？」

「貴様！ ラウ・ル・クルーゼか！」

クルーゼはリニアカノンの弾丸をすり抜け、ムウのゼロに銃を一発放ち、ヘルオポリスに侵入した。

その様子を見て、有線ガンバレルを収納したゼロのコックピットにいるムウは忌々しげにそのスラスターの尾を睨んだ。

「ちつ！ヘリオポリスの中に！」

ムウは言つより早くブースターを吹かし、急いでその後を追つてい
た。先程、宇宙空間を飛んでいくザフト製ではないMSを4機確認
した。今回の護衛任務でのパイロットの頭数は6人。すなわち、後
二機はヘリオポリスの中に居ることになる。

くそっ！！ やらせないぞクルーゼ！！！

ピキーン！！

え？ なんだ！？ クルーゼじゃない・・・これは・・・まさ
か！

まだ・・・まだコローーの中にいるのか！？

リオン！！！

ガンダム（後書き）

リオンの正体は、物語の根幹にかかわるのでお答えできません。

おそらく、なんじゃこりやあ、というものですね。SEEDでは出生と祖先の話、もしかしたら祖先のことは種^{テス}になるかもしれません。

アークエンジェル（前書き）

アークエンジェル登場！　それと、リオンの機体について説明します。

機動力は、フリーダム以下で、GATシリーズ以上。フリーダムはキラが言うには、四倍以上の性能らしい。『最初に乗り込む時にぼやいたような気が・・・』ですが、あくまでストライクの発展機なので、1・7倍です。一倍はやりすぎなので。

汎用性は、ストライクと同レベルですね。形はよくしているので。

アークエンジェル

side out

瓦礫が漂うシャフトの中で、地球連合軍のナタル・バジルール少尉は必死に生存者を探していた。

しかし、一向に生きている人間は見当たらず、逆に数多くの遺留品がナタルの目に止まる。

瓦解していくと思われるシャフトの内部には、奇跡的に酸素が残っている。先程まで一緒にいた者達も、所在がわからない。そんな戦争に巻き込まれた中立コロニーの悲惨さを嘆くことも忘れて、彼女は一心に暗闇に声を投げた。

「誰か…誰か居ないのか！」

叫んだ後、ナタルの目に飛びこんできたのは士官用の帽子…それを胸に抱え、ナタルは襲撃された時に何も出来なかつた己の身を呪つた。そして、自分を攻めれば攻めるほど目尻に涙が溜まつていく。

「くそつ…生き残ったものは！」

ボロボロの帽子を抱え、誰も居ない空間に悪態をつき、震える瞳で見つめる先に、返事があると期待していた訳ではない。自分の声しか聞こえない虚しい空間にナタルは一人、孤独に蝕まれていった。

ガン、ガン、ガン、ガン…

何処からか物音が聞こえてくる。音のした方向を見ると、ちょうど開かなくなつたドアを蹴破り、一人の男が入ってきた。

その地球連合軍の制服を着た男は、ライトを持つて同じく生存者の確認をしていくようだった。男にいきなりライトを向けられ、眩しさに目を思わず閉じるナタル。

「バジルール少尉！ご無事で！」

人がいること、ただそれだけなのに、ナタルの心は解れていぐ。その声に、普段厳格な表情も安堵に変わるのだった。

s i d e o u t

ヘリオポリス内、今だにアラートの鳴るエリアにキラ達は居た。ストライクとブレイドはフェイズシフト・ディアクティブモード（PS装甲無稼動状態）のまま、膝をついている。

ジンのパイロットは拘束し、田の届く場所においている。今の彼は、おどされたことがよほどショックだったのか、呆然としていた。

キラは負傷したマリューを手当にするために、被害の少ない公園のベンチにマリューを横たえさせた。

その間、カズイ、サイ、トール、ミリアリアと協力し、マリューの介抱を進めていた。

「・・・うぐー！」

痛みで目がさめるマリュー、しかし、お世辞にも爽やかな目覚めと

は言えない。目を開けたその先は焼けた土と人工物らしき面影を残すものがあった。その中で、背景に溶け込んでいない物… そう、人が居た。

「あ・・・気が付きました? キラ～!」

キラと呼ばれた少年が少女の声を聞き一人のもとへと駆け寄つてきた。その声を聞いて右手を額にやろうとするが、負傷しているのを忘れていたため、腕に激痛が走つた。

「ぐつ・・・!」

「まだ動かない方が良いですよ。でも、傷の具合は思つたより浅くて良かつたですね」

純粋にマリューを気遣つてゐる気持ちがマリューにもひしひしと伝わつてくる笑顔だった。

「すみません…僕…色々と勝手なことをしたみたいで…」

まだ火照つた体が重く、傷口の塞がつていないマリューは、自分が横たわつたままだ
という事実が、酷くもどかしい物だった。
本当なら、銃を向けてしまつたこと、突然MSに押し込んだことを謝罪しなければいけないので…

「お水…要ります?」

氣まずい雰囲氣を晴らさうと思つたのか、少女が水の入つたボトル

をマリューに差し出す。

・・・こは厚意に甘えましょつか・・・

「・・・ありがと。」

そう言って上体を起こそうとするが、上手く行かない。もう一人のガンダム操縦者の少年に背中を介添えしてもらい、私を起こしてくれた。

ボトルを受け取ったマリューは、開いているキャップに口をつけた。

「すっげえ、ガンダムっての」

「動く？動かないのか？」

非常事態とは思えない声が響いた。

え？

声がした方向を見ると、少年一人がストライクに乗っている。片方はコックピットに入り、操縦桿さえ握っている始末。

「お前等、勝手に弄るなって！」

眼鏡の少年が一人を制するが、一人は興味津々と言つた感じで聞く耳を持たない。

「でもなんでもまた灰色に戻つたんだ？」

「メインバッテリーが切れたんだとさ」

少年たちが何やら話しているようだ。ストライクはまだ充電、装備

が十分でなく、そのためエネルギーも早く切れてしまったのだ。

「その機体から離れなさい！！」

恩人とはいえ、機密に関わってしまった以上、不本意だけど彼らを巻き込まざるを得ない・・・

とはいって、体がうまく動かない。本来子供が乗るべきものじゃないのに・・・

「トール！ カズイ！ 早く降りろ！ これは兵器だぞ！」

隣にいた少年が厳しい声で叫んだ。

「え、ああすまんリオン・・勝手なことをしちゃって・・・」

「わ、悪かったよ」

二人はリオンと呼ばれた少年に従い、ストライクから降りた。

「助けてもらつたことは感謝します・・・でもアレは軍の重要機密であり・・・民間人がむやみに触れて良いものではないわ」

そう、それはそれ、これはこれなのだ。確かに彼らは恩人だ。でも・・・

「嘘...」うつむく。

元々自分達が不甲斐なかつたから起こつた不測の事態だ。彼等にも責任は無い、むしろ、ザフト兵に撃たれて、コックピットに無理や

リキラを押し込んだ自分に非がある。それは解っていた。

「一人ずつ名前を…」

確かに心苦しいものはある。

戦争には干渉しない中立国の「ローラー」、連合軍が入っているなど。だが、そうでもしなければ今までの行程は無かつただろう。皮肉にも、ローラーは以前というところで強奪はされてしまったが、せめて二機だけでも・・・と。

彼女は氏名を強制した。

渋々ながらもそれに従う一同。

「サイ・アーガイル」

「カズイ・バスカーク」

「トール・ケーニヒ」

「ミリアリア・ハウ」

「リオン・R・フラガ」

「キラ・ヤマト」

side out

「私は、マリュー・ラニアス、地球連合軍の将校です。申し訳ないけど、あなた達をこのまま解散させるわけには行かなくなりました」

厳しい表情を崩さぬまま、「えられた台詞を述べるよつ、淡々と言つマリュー。

「事情はどうあれ、軍の重要機密を見てしまつたあなた方は、然るべき所と連絡が取れ、処置が決定するまで、私と行動を共にして頂かざるを得ません。」

「そんな！」

「冗談じやねえよ、なんだよそりやあ！」

トール、カズイが上ずつた抗議の声を上げるが、そんな言葉は意味を成さなかつた。軍人と、民間人。はたから見れば、脅迫、拉致とも取れる方法。彼等が恐怖心を抱くほつが普通だ。

「従つてもらいます！」

強い口調で、マリューが言つ。

「僕達は・・・ヘリオポリスの民間人ですよー中立です！軍とかなんとかそんなの・・なんの関係もないんです！」

サイが叫んだ。今まで、平和だと思っていたヘリオポリス。現在では、見渡す限りの焼け野原。避難が遅れれば、怪我人だつて出るし、死人だつて出る。彼の言葉は正論なのだが、マリューは耳を傾けない。

元々戦争を終わらせるために軍人になつたのだ。自分ひとりで戦争

が終わると思えるほど自惚れてはいないが、それでも、Xナンバーは確かに戦争の鍵を握っている。ジンが使うM69バルスス改・特火重粒子砲とは比較にならない位小型の携帯ビーム兵器。

このデータがザフトに齎されてしまえば、瞬く間に連合は負けてしまうだろう。

そんな彼女の思いを知つて知らずか、カズイとトールは非難を続けた。

「そうだよ！」

「大体、なんで地球軍がヘリオポリスに居るわけさ、そっからしておかしいじゃねえかよ！」

「そうだよ！だからこんな事になつたんだろ！」

次々に非難を浴びせるカズイとトール、そもそも中立国の「ローラー」に軍が入ること 자체おかしいことなのだ。

「二人とももうよせ！・・・彼女に言つたつてもう無駄だ。上が決めたことを一兵士に言つたつてどうしようもない・・・」

連合の機密を知つてしまつた以上、彼女が俺たちを自由にすることは立場上不可能だ。

「でもよお・・・」

「カズイ・・・彼女だから運がよかつたけど、その発言はアウトだぞ。下手をすれば俺達は殺されていた・・・」

その単語に黙つてしまふカズイ。

s i d e o u t

ドック内、

爆発に巻き込まれ、瓦礫という巣の中、その白い装甲を煤で汚した新造戦艦。「アーヴエンジュル」はひつそりと息を潜めていた。

「無事だったのは、爆発の時、艦に居りましたほんの数名だけです。
・・ほとんどが工員ですが」

「状況は、ザフト艦はどうなつてゐる?」

「わかりません、私共もまだ周辺の確認をするのが手一杯で...」

ナタルがブリッジに入る、電源は落ちていて、少し薄暗かつた。そして、ナタルはアーヴエンジュルの電源を入れた。エネルギーの流れから来る音が艦全体を伝い、響き渡る。

「流石はアーヴエンジュルだな、これしきのことで沈みはしないか

...」

何処か安堵の表情で言うナタル。それもそのはず、アレほどの大爆発でも耐えぬいたのだ。新型のラミネート装甲の強靭な強度、それを今ほどありがたく感じたことは無かった。

「しかし、港口側は瓦礫が密集してしまっています、完全に...閉じ込められました。」

後から付いて来るまだ若い下士官の現状報告を耳で聞きながら、ナタルは外部との通信を計るために回線を開く。しかし、電子妨害がまだ続いている、モニターには耳障りなノイズが響いた。

「まだ通信妨害されている？だが…では…」ナタリは陽動…？ザフトの狙いはモルゲンレーーと言つことか？

途端にナタルの顔が悔しさに染まる。上唇をかみ締め、シートのクツショーンを握り締めた。ここまでMSの開発に力を注いできて、完成したところで横取りされる。良いように利用された…と、怒りの感情が沸々と湧き上がってきていた。

「くそっ！あちらの状況は！？」Gはどうなったのだ！？これでは何もわからん！」

ナタルがモニターを睨みつける。すると、砂嵐を呈するモニターから、ノイズ以外の音声が伝わってきた。

<・・・ちら・・・105ストライク…地球軍…応答請う…・・・>

はつとして一人は顔を見合させ、「G」がまだ無事だと云ふことを確認する。そして、その声が少年少女のものだということも驚きだ。

「…ひづらX105ストライク、地球軍応答請う！」

キラ達がノイズの向こうに向かつて叫ぶ。しかし、いつまでたっても返事はない。

「地球軍、応答請う！」

返事の返つてこない通信に望みを捨てたのか、キラ達は溜息をついた。

狭いMのピックアップの中でインカムをとつ、シートに肩を落とした。

そんな所に1台のトレーラーが着き、中からサイが出てきた。サイはマリューに対する警戒を解いていないようで、不貞腐れた様な素振りを見せる。

「ナンバー5のトレーラー……アレで良いんですね？」

サイが後のトレーラーを親指で指した。その先には緑色をした大型トレーラーがある。

「ええ、そう……ありがとうございます」

マリューが負傷した右腕を抱えサイに言った。

「それで、この後僕達は何をすれば良いんです？」

「ストライカーパックを、そしたらキラ君、もう一回通信をやつってみて？」

「分かりました」

キラはコックピットの中での点滅を繰り返しているモニターを見て、答えた。

荒れ果て、瓦解したコロニーから眼をそむけるために。

side out

「くつー」んな所で…」

シグーがマシンガンを連射しながら高速でゼロを牽制する。ムウがそう愚痴を垂れるのも無理はない。

ここはヘリオポリスの支柱の役割を果たす部分で、ここが壊れたらヘリオポリスも崩壊することを意味しているのだ。

「」でリニアガンはマズイ…

その隙をついたのか、クルーゼはゼロの死角に入った。入り組んだ空洞で展開されているこの戦闘は、一進一退。

「」の辺で消えてくれると嬉しいんだがね…ムウ！」

それは「」のセリフだよ…！

死角から飛び出したシグーはゼロに向かつてマシンガンを放つ。しかし、ムウはブースターを使ったが有線ガンバレルをうち抜かれ、舌打ちした。そのガンバレルを放棄し、ムウは後退しながらリニアカノンを撃つた。

「艦を発進させるなど…」の人員では無理です！」

下士官、アーノルド・ノイマンが文句を言うが、当のナタルは聞く耳を持たない。元々工員だった自分達、そして満足な経験も無い自分達では当たり前な反応だ。

「そんな事を言つてゐる間にやるにまじついたら良いかを考えろ…」

ブリッジの中、艦長席に座つたナタルは顔を引き締めた。

「モルゲンレー テはまだ、戦闘中かもしれんのだぞ！」

ナタルが艦長席の機器類を調整しながら言つ。

「それをこのまま、ここにこもつて見過ぎ」セドモウがつのか！？」

ナタルがそう声を張り上げている時、入り口から3人のクルーが入つてきた。

「連れて参りました！」

眼鏡をかけた男、チャンドラと、小太りな男ロメル・パルを連れた黒髪の男性ジャッキー・トノムラがナタルに言つ。それを聞いたナタルは三人に向き直り、檄を飛ばした。

「シートにつけ、コンピュータの指示通りにやれば良い」

実戦経験のあまりない人間に無茶を言つたナタルにいらついたのが、ノイマンはナタルに抗議した。

「外にはまだ……ザフト艦がいます。戦闘など……できませんよー！」

何処か投げやりな抗議に腹を立てるナタル。

「わかつてゐる……艦起動と同時に特装砲発射準備……できるな、曹長！」

渋谷ノイマンはシートにつき、コントールを叩き始めた。

「発進シークエンス、スタート、非常事態の為、プロセスC30からC21まで省略、主動力、オンライン」

そこにはいる全員がキー・ボードを叩き、モニターに様々な映像をだす。

「出力上昇異常無し、定格まで… 450秒！」

「長すぎる…ヘリオポリスとのコンジットの状況！」

「生きてます！」

「そこからパワーを貰え！」「コンジットオンライン、パワーをアクティブレーターに接続！」

「接続を確認、フロー正常、定格まで20秒！」

「生命維持装置異常なし」

「CICOオンライン」

「火器システム、オンライン」

「FCUオンライン！」

「磁場チェックバー及びペレット、ディスペンサー、アイドリング正常」

「外装衝撃ダンパー最大出力でホールド！」

「主動力コントラクト」

「エンジン異常無し！」

「アーチェンジエル全システムオンライン、発進準備完了！」

今ここに、全ての発進準備が整い、アーチェンジエルは微妙な振動を始めた。それは船体が浮き上がっている証拠。

「気密隔壁閉鎖、総員、衝撃及び突発的な艦体の破壊に備えよ、前進微速…アーチェンジエル発進！！」

アーチェンジエルは瓦礫を跳ね除けながら微速を始めた。そして、その特徴的な船体は、まるで外界が歓迎の意を表すように「ロローー入り口に向かっていった。それはただ、ドックの気密隔壁が不完全になってしまい吸い込まれているだけだが、その場にいるものは一同がそう感じていた。

狭いシャフト内では白熱した戦いが行なわれていた。しかし、本来ならば速度制限が出る場所であつても双方とも全速力で戦闘していた。

「ちつ！」

ムウがガンバレルを放ち、障害物をすり抜けながらリニアカノンを放つ。しかし、シグーは持ち前の機敏さを活かし殆どの銃撃を避けた。

この戦いはエースパイロット同士であるから成り立つのであり、素人が乗っているならシャフトの内壁に当たり自滅するか、相手の攻

撃が当たり落ちるかが関の山だ。それほどまでに一人の空間把握能力や操縦センスは高く、一進一退の攻防を繰り広げていた。

突如、シグーが展開されていたガンバレルを踏みつける。シグーが飛びあがった後、ガンバレルは絶妙のタイミングで爆発した。そして、重突撃機銃を構えゼロに向かい銃弾を放つ。しかし、ムウはゼロを障害物の陰に走らせ、上手くやり過ごした。外壁に幾つもの流れ弾が飛んでいく。ムウはクルーゼのシグーに押される形で、ヘリオポリスのモルゲンレー地区に後退していく。

side キラ

キラは目の前のトレーラーに混載されている細長い砲状の物を見渡し、困惑の声を上げた。

「パワー・パック……どれです？」

迷うのも無理は無い、トレーラーのコンテナに収納されているパックは数種類あり、どう扱えば良いのか、皆目見当がつかなかつたらだ。形状から察するに火器らしく、マリューから聞いた「パワー・パック」…バッテリーと想像できる代物は無かつた。細長い砲は濃い緑色をしており、先程のマリューの言葉を思い出す。

『ストライカーパックを、そしたらキラ君もつ一回通信をやってみて?』

こんなMSなど知らないキラに対し専門用語を羅列するマリューに何處か腹たらしいものを感じたが、敢えて追求はしなかった。説明書無しにプラモデルを組み立てる感覚だ。バッテリー残量が必要最

低限しか残つていないこともあり、無駄な動きは禁物だ。さっさとパワーパックを装備して、とりあえずの稼働時間を確保したかった。先ほどの様に、ジンがまた攻めてくる可能性もある。あるいは、奪取した機体を戦線に投入してくる可能性すら。

「ストライカーパックとバッテリーは一体に成っているの、そのままで装備して！」

マリューが声を上げた。

「まだ解除にならないのね……避難命令」

普段の陽気なミリアリアの声とは違い、今は何故か弱々しい。解除にならないこと、それすなわち、現在も危機が回避されていないと、いつことに他ならない。

「親父やお袋たちも……避難してるのかな？」

サイは今朝まで一緒にいた両親の事を気にかけているようだ。

「あ～あ、早く家帰りてえ」

無氣力な声を上げるカズイ。だが、次の瞬間、巨大な爆発音がヘリオポリスに響いた。

その音に驚愕した一同は、音の方向に眼を向ける。すると、爆発の炎が煌々と上がっていた。

side out

「ほう・・・あれか」

シャフトの一角を破壊した際の爆炎を貫いたシグーの中、クルーゼは不敵な笑みを浮かべていた。モニターに映るミゲルの機体を撃退した地球軍のMS。その脅威は早いうちに刈り取つておくに越したことは無かつた。クルーゼはシグーを反転させ、ストライクとストライクファンтомに向かう。

ガンバレルを全て破壊されたゼロを引き離して。

「最後の一機か！？」

ゼロはなおもシグーを追いかける。ムウは大地に足をついているMSを見つけると、驚愕を含んだ声を上げる。MSは灰色に黒ずんだボディを煤に汚して、無防備な姿を晒していた。もう一機は、直立不動のまま、動く気配もなかつた。

彼はゼロを懸命に動かし、シグーに攻撃を仕掛ける。有線ガンバレルが全てなくなつた今、攻撃手段は一つしかない。クルーゼのシグーを撃破出来る確立は・・・計算したくもなかつた。

クルーゼのシグーはゼロのリニアカノンを避けていく。ゼロも追随するがやはり機動性能の差か、追いつくことが出来ない。巻き起こした風が、サイ達に吹き付けた。

「きやあ！？」

思わず悲鳴を上げるミコアリア。強風に煽られた砂が、埃が、小さな礫となつて身体を打ち付ける。

「装備をつけて、早く！」

爆音を見て、半ば自失に陥つていたマリューは我を奮い立たせた。ここでストライクとファンтомを、最後の一機を破壊されるわけに

は行かない。そう思ったマリューは叫び、トレーラーに向かって走り出していた。

ゼロのリニア・アカノンが空を裂く。巧みな操縦でシグーはそれをやり過ごしていった。対するシグーもマシンガンで牽制しつつ、ゼロとの距離を詰めていく。間合いに入った瞬間、クルーゼは剣を引き抜いた。

「つー」

ムウはそれを認めると、リニア・ガンドで打ち落とすと機体を傾かせる。それを読み、背後に回り込んだクルーゼは狙い通りに剣を振り払う。

「何！？」

重い音が、ゼロのコックピットに木霊する。狙いすまされた一撃は、ゼロのリニア・アガンの砲身を切り裂いたのだ。バランスを失い、シグーに振り返ろうとするゼロをクルーゼは通り過ぎ、眼下のストライクに照準を合わせる。

「今のうちに沈んでもいいつー！」

獲物を見据え、クルーゼは冷徹に叫んだ。

side リオン

あのMSにあのMA…確証はないけど、まさか兄さん？

リオンは眼下で繰り広げられている高度な空中戦を見ていた。しか

し、MAのリニアガンは、切断され、今度はストライクを狙つてき
た。

「キラはやられないと！」

意を決し、敵MSに突撃していった。

一方アークエンジュエルでは。

「特装砲発射と同時に最大船速！」

現存する戦艦で、右に出るのは無い砲。特装砲、ローエンゲリンのエネルギーをチャージしていた。

一刻も早く、通信で助けを求めていたX-105ストライクを助けなければならぬ。

開かれた砲身が迫り出し、エネルギーが満ちていく。空気を切り裂く音が聞こえたかと思うと、ロー・エングリンが発射され、眼前の瓦礫を吹き飛ばした。

「何・・・？」

「何が・・・？」

突然、空を切り裂いた放火に、クルーゼとリオンは一切の行動を止
めてしまう。突き抜けた、力有り余る砲火は対面のコロニー外壁を
破壊する。瓦礫を吹き飛ばされた港からは、見慣れぬ白い物が飛び
出していた。

「・・・・・」

それは巨大な戦艦だった。

リオンはその大きさと形の異質さに啞然としていた・・・

アークエンジェル（後書き）

死に行つてますね。彼は・・・ラウさんに突っ込むとは・・・

やっぱヘリオポリス（前書き）

今回はムウせん達と合流します。・・・更新が遅れ、すみませんでした。

ならばヘリオポリス

side リオン

「なんだあれは・・・戦艦か！？」

にしては、なんだこれ？ 白やら赤やらどんでもなく派手だな・・・

リオンは、呆然としながらも動きを敵MSにトーデスシュレッケンで牽制射撃を行う。

しかし敵は弾幕を躱しながらファントムに実体剣を抜いて斬りかかつってきた。

ピキィーン！！

「そんな攻撃で・・・！」

リオンも負けじと腰からビームサーベルを抜いて鍔迫り合いに持ち込む。だが、リオンは知らないが相手はあのラウ・ル・クルーゼなのだ。いかに機体性能に差があったとしても、彼はMSをまだ動かしたばかりの素人・・・

しかしその道理が通るのは、彼が普通の素人であつたらの話だ・・・

「誰だか知らないが、キラは討たせない！！」

鍔迫り合いのなか、リオンはビームサーベルをわずかに横にずらしながらブーストをかけ、敵MSの片腕を切り裂いた。

side クルーゼ

目の前の機体に乗っているのは、本当に民間人か？ とても素人が乗っているとは思えんな・・・

「だが、隙だらけだな・・・」

私はジグーの片腕と引き換えに、あの黒い機体の死角に回り込み、背中を蹴り飛ばした。

「ぐああ！？」

衝撃に耐えられず、地面に落下してゆく黒い機体・・・性能はいい、センスを感じた・・・だが、戦闘経験はない素人・・・なに！！

地面に叩きつけられるだろうその黒い機体は反転しながら体勢を立て直し、地面に降り立った。

まさか、ナチュラルにこれほどパイロットセンスを持つものがいたとはな・・・だが、

黒い機体は、こちらに攻め込む気配がない。どうやら先の衝撃が相当こたえたようだな。

しかし、私とてここに長居するのは愚策かな・・・得体の知らない戦艦に、もう一機の最新鋭MS・・・こちらは片腕を不覚ながら奪われてしまった・・・

「イニが潮時だろうな・・・」

戦艦から繰り出される緑の閃光が私に迫るが問題ない。あの程度の砲撃には当たらんよ。

ラウ・ル・クルーゼは、戦艦から繰り出されるビームや弾幕をあざ笑うかのように余裕で避け、速やかに母艦へと帰投するため、現宇宙を離脱した。

アスラン・ザラは奪取した機体でヴェサリウスに向かう途中だつた。
・・・・・キラ・・・・・。

さきほど爆炎の照り返しの中で見た顔が、目の前にちらつく。大きく口を見開き、その口は確かに「アスラン?」と動いたように見えた。まさか・・こんな所でかつての親友と再会するなんて。

「いや・・・・・あいつがあんな所にいるはずが・・・・・

否定しつつ、心の奥底では確信していた。

俺がキラ・ヤマトを見間違えるなどありえない。
と、その時通信が割り込んできた。

・・・・・被弾した。帰投する。

クルーゼ隊長が被弾? いったいなにが起きたんだ?

side out

「ラミアス大尉!」

格納庫には、大勢のクルーが集まつてきていた。その中にいたナタルが、マリューの姿を見とめ駆け寄つてくる。その後ろを遅れてついてくる下士官たち。

「じ無事で、何よりです!」

敬礼。

そんなものをしたのが大分久しぶりに思えた。マリューも同じく敬礼で返し、ほつとした顔で応じる。

「あなた達も・・・、良くアークエンジエルを。お陰で助かつたわ。」

マリュー・ラミアス本来の顔に戻ったのか、無事を喜ぶ顔は優しかった。そして、ストライクとファンタムのハッチが開き、キラトリオンが機体から降りてきた。

「ラミアス大尉・・・これはいったい・・・？」

ナタルが困惑の声を上げた。

中に入っているのはトップガンであるGのパイロット。そう考えていた彼女にとって、今コックピットから降りてきた青年達は不可解だった。

一人の服は気取らないラフな服装のように見えて、ファッショニ性も悪くは無い。顔は東洋系の整った顔立ちで、アメジストの瞳を持つ眼は切れ長で、黒髪は男性にしては長め。ナタルはその容姿を記憶に符合させていく。

もう一人も普通の格好をしていて、端整な顔立ちをした、天然パーマが少し入った金髪の少年。眼光は鋭く、黒髪の少年より男らしい雰囲気だった。

「あー・・・、感動の再会を邪魔して悪いんだが・・・え？」

突然、横合いから聞きなれぬ声が届いた。

その方向を見ると、紫と白、黒のパイロットスーツを纏った金髪蒼眼の男が歩み寄ってきていた。

容姿は整っているが、それにやけた顔・・ではなく、驚愕した顔が台無しにしてしまっていた。短めの金髪も、汗のせいで少々くすんでいる。

男はマリューの手前まで来ると、そのままのスタンスで口を開いた。

「・・・地球軍、第七機動艦体所属、ムウ・ラ・フラガ大尉、よろしく。」

敬礼をして見せるが、何處か不眞面目な感じを受ける。
それと同じく、マリューとナタルもそろって敬礼した。

「第一宇宙域、第五特務師団所属、マリュー・ラミアス大尉です。」

「同じく、ナタル・バジルール少尉であります。」

一人の名を聞いて、ムウと名乗った男は敬礼をとく。

「乗艦・・・許可をもらいたいんだがね、この艦の責任者は?」

彼こそ、先ほどシグーと戦つた彼専用MAメビウス・ゼロのパイロット。エンディミオンの鷹と名高い連合軍のエースパイロットだ。彼は血のバレンタインでMA隊の長を務め、月のエンディミオンクレーターで戦功を上げたことからその字を受けたのである。

「・・・艦長以下、艦の主だった士官は皆、戦死されました。よつて今はラミアス大尉がその任にあると思いますが。」

重い口を開き、ナタルが歯切れ悪く言った。

「え・・・」

「無事だったのは、艦にいた下士官と、十数名のみです。私はシャフトの中で、運良く難を逃れました・・・」

「艦長が・・・そんな・・・」

愕然とした顔のマリュー。

1時間前に、別れを告げたのが最期となってしまうなどとは、考えてもいなかつたのだから。

「やれやれ、なんてこつた。ああ、ともかく許可をくれよ、ラミアス大尉。俺の乗ってきた船も落とされちまつてね。」

やはり、飄々とした口調で髪を弄りながら咳くムウ。
ここで、ヘリオポリスに入った時の予感が当たつてしまつたということを思い出した。悪い予感はしていたが、虎の子のMSを掠め取られるとは大層な皮肉。まさに「鳶に油揚げを攫われた」とはこのことだ。

「ああ、はい。許可します。」

それを聞くと、ムウはキラ達の前に歩み寄った。

「まつたく・・・皮肉なもんだな・・・」

彼は苦々しい顔で、キラ達の前に進み出た。

「な、なんなんですか?」

「…………」

ムウは唐突に口を開いた。

「…………お前があれに乗っているんだ……リオン?」

side リオン

ムウの言葉に、その場の空気が凍りついた。

リオンはムウを見つめ返す。キラ達はその言葉に驚いて、リオンを見つめる。ラミアス達も彼を見つめた。

「ヘリオポリスの混乱に巻き込まれて……成り行きで乗った。」

「…………そとか…………そして、もつひとつこの君は……『コードネイターだね?』

とたんに、マリューとナタルの背後に控えていた兵士達が、銃を構えた。

銃口はキラを狙っている。

この戦争はナチュラル対コードネイターだから無理もない状況かもしれない。

だけど……

「…………なんなんだよ! それ!」

トルが叫び、かばうようにキラの前に出た。

「コードネイターでもキラは敵じゃない! ザフトと戦って俺達を守ってくれただろ! ? あんたら見てなかつたのか?」

彼はキラに向けられた銃口を睨みつけ、一戦をも辞さないという様

子で必死に訴えた。するとリオンがトール達の前に出て、ムウの前に立つ。

「キラに手を出さないでくれ兄さん。キラはザフトとは無関係だから……」

「やうなのか？」

ムウがリオンに質問した。

「え！？ この人……リオンの兄さんなの！？」

キラが目を見開いて、リオンに尋ねる。あ、みんなには言つてなかつたな……

「やうなの、リオン？ あなたのお兄さん、軍人だったんだ……」

ミリアリアが驚きながらこちらを見る。……てか、そんなに見ないでくれ……

「大分年は離れてるけど……兄さんだよ……兄さん、お願いだから……」

「そりゃ……なら、銃を……「銃を下ろしなさい」……」

ムウではなく、マコニーが命じた。

「そりゃ驚く子とわないでしょ。ヘルオポリスは中立国の『ロニー』だった。戦火に巻き込まれるのが嫌でここに移った『ディネーター』がいたとしても、不思議じゃないわ」

「いや、悪かつたな。とんだ騒ぎにしちやつて」

と、その騒ぎを引き起こした張本人が、悪びない調子で言った。

「兄さん……」「リオンは、彼のそんな調子に少し困惑していた。

「俺はただ聞きたかつただけなんだ。ここに来るまでの道中、『G』のパイロットになるはずだった連中のシミュレーションを結構みてきたからさ。やつらノロクサ動かすのも四苦八苦してたんだぜ」

ムウはちゅうと肩をすくめると、きびすを返した。

「それをいきなり、あんな簡単に動かしてくれりまつんだからさ」

それは俺にも言えるはずだが……

『ミニアス大尉、バジルール少尉！至急ブリッヂへ！

side out

「どうしたー？」

MSですっ！

身を固くしたマコニーの背中を、ムウが叩く。

「指揮を執れ！君が艦長だ」

「わ、私が……！？」

「だろ？先任大尉は俺だろうが、この艦のこととはわからん

マリューとナタルは一瞬顔を見合し、

「アーヴエンジエル発進準備！総員第一戦闘配備！ストライクはパックを！ファンタムは急いで補給を！」

「行くぞ、キラ」

「え・・あ、うん・・」

キラとリオンは急いで自分にMSに乗った。そして、艦内に警報が響き渡つた。それを聞きながら、ミリアリアがそつとつぶやいた。

「キラとリオン・・・・・大丈夫かしら」

「信じるしかないだろ・・・俺たちは・・・」

トールが強く、その肩を抱いた。サイ達は、ただ彼らを見守ることしかできない。

激しい爆音がコロニーを揺さぶつた。

隔壁に新しい穴が空き、そこからジンの編隊が侵入してきた。

s i d e o u t

それぞれ大型のミサイルランチャー や特火重粒子砲を装備したジンをモニターで捉え、艦橋のCICに入つたムウが毒づいた。

「拠点攻撃用の重爆撃装備だと…？ あんな物をここで使う気か？」

敵も相当あの一機に固執してゐるな… それにしても、なぜり

オンがあれを扱えたんだ？

編隊のあとから、一機、きらりと赤く光る機体が見えた。情報を分析していたトノムラが、息をのむ。

「い・・・・・一機はX303・・・イージスです！」

奪取されたXナンバーの一機だ。艦橋に重苦しい空気が流れた。自分達の造り上げたモビルスーツに攻撃されるとは……。

「もう実戦に投入してくるなんて・・・・・！」

早すぎだろ・・・おい・・俺の機体はまだ修理中で、あいつらだけに戦わせるとは・・・

マリューは苦々しへつぶやき、拳を握り締めた。するとムウがあつさり言い放つ。

「今は敵だ！あれに沈められたいか？」

「コリントス発射準備！レーザー誘導、厳に！」

CHCのナタルの指令にかぶせ、マリューが命じた。

「フェイズシフトに実体弾は効かないわ。主砲レーダー連動、焦点拡散！戦闘ではコロニーを傷つけないよつ、留意せよ。本艦はヘリオポリスからの脱出を最優先とする！」

ストライクのキラは破壊されたモルゲンレーでストライクのパーティを探していた。

「ソードストライカー…………劍なのか？」

十五・七八メートル対艦刀シユベルトゲベール、実刀、レーザー刃を兼ね備えた、戦艦の装甲さえ切り裂く強度を持つ、接近戦用の装備である。だが、

「こんな大振りの剣じゃ、MSに当たらない……」

キラは苦々しく思いながらストライクを駆り、高くジャンプさせた。そしてキラに向けて一機のジンが大型のミサイルで撃つてきた。ロックオンの警告が「クピットに響き、キラはあわてて回避行動をとった。ミサイルは、とっさに回り込んだアキシャルシャフトに命中する。シャフトは、まるで紐のように引きちぎられ、宙をたうって落下した。

「ぐわ・・・・・」

「最後の一機の一つ・・・落とすぞ!—」

「了解!—」

そのころファントムはアークエンジュルに発射されるミサイルを全て迎撃し、イージス、ジン(三機にトーデスシユレッケン(以下バルカンと表記)で牽制し、隊列を乱そうとしていた。

「アスラン、奴の後に回りこめ!挟み撃ちでやるぞ!」

「・・・・わかつた」

• • • • キラ

——了解！」

ファントムに向かつて襲いかかるジンは、火粒子砲を構えたまま突進していった。それに続き、後ろの一機は、ファントムに攻撃し、先行したジンを援護している。

リオンは、火粒子砲の攻撃を避けながら、ビームライフルで反撃し、先行したジンの火粒子砲に命中させ、両足をビームサーべルで切り落とした。

落下する僚機。その手際の良さに、アスランは、見方を変えた。

あれば、もう素人じゃない・・・MSに乗つたばかりですぐに戦闘ができるなんて・・・

な、何いしゃ！？

「ナチエラルが!!! 討ち果たしてくれる!!!」

ジンのパイロット達は僚機が撃墜されたことに憤り、火粒子砲とミサイルを発射しながら、ファントムに襲い掛かる。

前に出るな！！
迷惑すぎだ！！

しかし、その言葉ももはや意味はなく、ファンタムは最小限の動きで、ビームを躲し、ミサイルをバルカンで迎撃した。

そして同時に一気に距離を詰め、一刀のビームサーベルで一機を同時に撃墜した。

「うわあああああーー！」

「馬鹿なあーー！」

- ・ そして同時に爆散する一機。 . . . こいつはこじりで始末しないと . . .
- ・ そこへ、ストライクがやってきた。

・ あの機体には、キラが乗っているかもしねーい . . .

side キラ

キラは後ろを見た。そこには見覚えのある赤い機体がいた。

「あのモビルスーツ」

あの時モルゲンレーーーから飛び立つた機体だ。アスランと出会った直後に . . .
. . 。

いいや、あれはアスランじゃない。アスランが平然と人を殺したりするわけがない。

つよく首を振つて否定しようとしたキラだったが

キラ・・・・・キラ・ヤマト！

無線から入つてきた声に、はっと目を上げる。

「アスラン？・・・・・アスラン・ザラ！？」

やはりキラ？・・・キラなのか？

空中で向き直る両機・・・しかし、最初に撃破したジンが、最後の一本のアキシャルに激突、爆散し、シャフトにあたってしまい、シャフトは炎の尾を引きながら地表に倒れ、衝撃でコロニー全体が軋み声を上げる。

アスラン？・・・・アスラン・ザラ！？

s.i.d.e リオン

「キラ！？」

三機のジンを手早く撃墜した後、俺は空中で微動だにしないストライクと赤い機体・・・確かにイージスだったか・・・に戸惑っていた。

それよりも戦闘に参加し、いきなり三機も撃墜したことによりオンは少し罪悪感を感じていた。だが、やらなきややられる。俺たちが倒された後、みんなが殺される。・・・そんなことはさせない。だから俺達は、生き残らなきやいけないんだ。

あの機体のパイロットは・・・キラの知り合いなのか・・それでも俺は・・・敵の命を奪うべきなのか？
そうなれば・・・キラは悲しむだらうな・・・

俺は両者の間に割つて入ることはできなかつた。

最前から大きく軋み、過負荷に耐えて身をよじるよつに揺れていたセンターシャフトが、ついに崩壊をはじめた。轟音を立てながら、ロロニーの背骨とも言ひべきシャフトが分解をはじめた。

ヘリオポリスは凄まじい勢いで亀裂が広がり、その瞬間、真空の暗闇がぽつかりと口を開ける。

その亀裂に引きずり込まれる両機・・・

「くわっ！ 何やつてんだあいつら…」

リオンもスラスターをきかせながら亀裂に突入した。

さりばヘリオポリス（後書き）

次回は原作通り、キラガポッドを見つけます。
まだまだ話数は少ないですが、頑張っていきます。

「おなかのじ」と「おなかのじ（繪書）」

かの一つの作品まだ時間がかかるまい。……
この話はいつかの話をじつに。

「これから」

side キラ

X105ストライク、応答せよ

通信はやつきから、同じ呼びかけを続けている。コックピットの中ではキラのせわしない呼吸音だけが聞こえていた。

ヘリオポリスが・・・・崩壊していく・・・・。

ついでつきまで踏みしめていた大地は、バラバラに四散し、宇宙空間を漂っていた。

・・・・じつして・・こんなことに・・?

明日も明後日も変わらないと信じていた日常がなんで・・・・?

・・・・X105ストライク! 聞こえているか? 応答せよ!

通信機の声に焦りが混じっていた。ふいに、

・・・・キラ君!

自分の名を呼ばれ、キラははっと自失かられた。あの女性仕官マリューさんの声だった。

聞こえていたら・・・無事なら応答して。キラ君!

「あ・・・・はい、」ちりり・・・キラです。」

キラは通信機のスイッチを入れ、答えた。マリューさんの声に安堵がにじむ。

無事なのね？

「はい、何とか・・機体にも問題はなさうです。」

「ひらの位置はわかる？ 帰投できるかしら

「はい・・・・・・

キラは口元をひきしめ、あらためてレバーを握りなおし、アーフエンジンヘルヘと向かう。

そのとき、電子音がコツクピットに響き、モニターになにかが表示された。

「 救難信号・・・・? 」

s.i.d.e リオン

「 ようやく、キラが見つかったのか、兄さん？」

キラが発見されたとの連絡が送られ、俺は兄さんに確認を取った。

「 ああ、間違いない。・・・まさかお前まで戦争に巻き込まれてしまつとはな・・・」

「気にしないでくれ兄さん。もつ過ぎたことだから・・・」

俺達は、戦争にもう介入しているんだ・・・今更中立とか言つても意味がない・・・

「リオン!! そつちは無事なの?」

モニターからストライクが近づいてくるのが見えた。・・・あれ? 何を持つているんだ?

円筒形の細長い・・・棒?

「推進部が壊れて漂流していたんだ」

ストライクは、その両手に一隻の救難ボートを抱えていた。

「そりか・・・それで見過しそせなかつたんだな? で、どつするんだ?」

「なら、君は見捨てるのか? 「誰が見捨てるなんて言つたよ。」「え?」

「まったく、俺が見捨てるとか思つていいのか? 俺がお前の立場でも助けたよ」

心外だな、まったく・・・

リオンは苦笑しながらキラヒに言つた。

「『めん、少し気が動転してた。でも、の人たちが受け入れてくれるかどうか……』

「…………俺も協力する。見捨てる」となんてできない。」

そして、現在

「このまま放り出せとでも言つてですか？避難したヘリオポリスの市民が乗つてるんですよー！」

キラが喧嘩腰に喧嘩腰に言つと、モニターの中でマリューがため息をついた。

・・・・いいわ、許可します

すると、ナタルが反論した。

本艦はまだ戦闘中です！避難民の受け入れなど・・・

壊れていってはしかたないでしょう。今はそんなことで揉めて時間を取りたくないの

艦長に良心があつてよかつたよ・・・

side out

ストライクとファンタムの着艦を聞いて駆けつけた友人達が、コックピットから降り立つたキラに飛びついた。

「よかつたなあ、キラ！」

「無事だつたんだなー。」

トールに抱きつかれ、サイに頭をぐしゃぐしゃにかき回され、キラは目を白黒させつゝも、ほっとした様子で笑った。リオンもキラに続いて微笑んだ。すると格納庫の別の方から、声が上がった。

「サイー！」

赤い髪がたなびいた。救難ボートから出てきた避難民の中から、一人飛び出した少女はフレイ・アルスターだった。彼女はまっしづらにサイの胸に飛び込む。

「ねえっ、いつたい何があったの？ヘリオポリスは？あの混乱で、私みんなとはぐれちゃって・・・とっても心細かったのよー。」

抱きつかれたサイは驚き、しかしそう嬉しそうにフレイの肩に腕を回した。

「で、ここはなの？」

フレイはサイから離れて、あたりを見渡しながら言った。

「ああ、ここは

side out

「ザフト艦の動き、つかめる？」

マリューの問いかけに、レーダーパネルを見るパル伍長の答えは冴えなかつた。

「無理です。ヘリオポリスの残骸の中には、いまだ熱をもつ物多くこれではレーダーも熱探知も役に立ちません……」

「む、いつも同じだと思つがね」

ムウが、少し氣休めになることを言つた。マリューは考え込む。

「…………いま攻撃をつけたら、こいつに勝ち田はないません」

「だな。こちには虎の子のストライクとファントムと俺のボロボロのゼロのみだからな。戦闘はな……。じゃ、最大戦速で振り切るかい？かなりの高速艦なんだろ、こいつは？」

「む、こいつも高速艦のナスカ級がいます。振り切れるかどうか……。
……」

「なら、素直に投降するか？」

その言葉に、マリューはぎょっと目が見開く。だがムウは颶々と肩をすくめてみせた。

「それもひとつ手ではあるが」

突然『艦長』と呼ばれ、この席につかされることになつて、実戦経験のほとんどない彼女はまだ困惑していた。もっともクルーのほとんども彼女と同様だ。しかし……。

「投降するつもりはありません」

彼女はしいて、せつぱんと言つた。

「「」の艦とストライクとファンタムは、絶対にザフトには渡しません。我々はなんとしても、これを無事に太平洋連邦司令部へ持ち帰らねばならないんです」

「だが月本部とすら連絡の取れない」の状況でビリする？意気込みは買つが、それだけじゃな・・・・」

今度は揶揄するだけでなく、ムウも難しい顔で考え込んだ。
そこへ、ナタルが口を挟んだ。

「艦長、私はアルテミスへの寄港を具申いたします。」

その提案に、一人の大尉が、はつと顔を上げた。

「あそこは現在の本艦の位置から、もつとも取りやすいコース上有る友軍です」

「傘のアルテミスか・・・・」

ムウがつぶやいた。

アルテミスとは、現在からほど近い宙域にあるコーラシアの軍事衛星だ。

「でも、G計画の一機もこの艦も、公式発表どおりか友軍の認識」「
一ドすら持つてない状況よ・・・・」

「ですがこのまま月に針路を取つたとしても、途中戦闘もすんなり

行けるとは、まさか思いではないでしょう？物資の搬入もままならぬまま発進した我々には、早急に補給も必要です」

ナタルの言つとおりだ。

戦闘がなかつたとしても、途中で物資が足りなくなることは田に見えている。

ナタルは言葉をついだ。

「事態はコーラシアにも理解してもらえたものだと思います。現状はならべく戦闘を避け、アルテミスにて補給を受け、そのまま月本部との連絡をはかるのが、もっとも現実的な策かとおもいますが」

「アルテミスねえ・・・・・・

ムウが懷疑的につぶやく。

「セウルの思惑ビビリに行くかな・・・・

「でも・・・今はたしかに、それしか手はなさそうね」

マリューがためらいつつも、決断をくだした。

「デコイ用意！発射と同時にアルテミスへの航路修正のため、メインエンジン噴射を行なう。のちに慣性航行に移行。第一戦闘配備！艦の制御は最短時間にとどめよー」

マリューが指示を出す。

「アルテミスまでのサイレンタランニング・・・・およそ一時間つてどこか」

ムウがつぶやく。クルーたむけに緊張した面持つだ。

「…………あとは運だな」

マシューが号令した。

「…………デコイ発射！メインエンジン噴射！艦アルテミスへの針路へ航路修正！」

side out

「いのよつの事態にならうとは…………」

ヴェサリウスの艦橋では、いまだに動搖のさめない様子でヘリオボリスが存在していた宙域を見つめるアーティスがいた。

「いかがされます？中立国のロロニーを破壊したとなれば、評議会も…………」

「地球の新型兵器を製造していたロロニーの、ビジが中立だ」

「ウの顔には一粒の迷いも、後悔も見出せなかつた。

「住民のほとんどは脱出してゐる。そして問題はないわ。……血のバレンタインの惨劇に比べれば」

アーティスは言葉をのみ、またスクリーンを見やつた。たしかに……あの惨劇と比べれば……。

「アーテス、敵の新造戦艦の位置、つかめるかな？」

「ラウの言葉に、アーテスは驚いた。

「まだ追いつもりですか？しかし先の戦闘で、一いちじにはすでにMSが

「あるじゃないか。四機も」

「地球軍から奪ったMSを投入させるんですか？」

「データの吸い出しあえ終われば、かまわんさ。・・・あの艦はどうあっても逃がすわけにはいかんよ」

ラウは戦略パネルを見つめて言った。

「網を張るかな・・・・・」

「網、で、ありますか？」

「ヴェサリウスは先行し、ここで敵艦を待つ。ガモフにまじのマークスを取らせ、索敵を密にしながらついて来させり」

ラウの指が示す所を見て、アーテスが眉を寄せた。

「アルテミスへありますか？しかしそれのみに絞つたのでは用方面へ離脱された場合・・・・・」

彼の反論は、通信兵の声にさえぎられた。

「大型の熱量感知！戦艦のものと思われます！諸元解析予測コース、地球スイングバイにて、月面、地球軍太平洋連邦本部！」

アーデスが見ると、ラウは首を振った。

「それは、囮だな。今ので私はいつそう確信した」

ラウは言い切った。

「やつらはアルテミスへ向かう。ヴェサリウス発進。ガモフを呼び戻せ」

side アークエンジェル

「・・・おいおい、無茶言うなよ！」

ムウが大きく手を振った。彼らはまだ会談中で、苦々しい顔をしている。マリューが言う。

「ですが、せめてストライクかファントムの力は必要になるかもしれません。フラガ大尉に乗つていただければ・・・・・」

「冗談。あの坊主達が書き換えたっていうOSのデータ、見てないのか？あんなもんが俺に・・・・・ってか、普通の人間に扱えるかよ！」

マリューは愕然として黙った。彼女自身、キラのOSカスタマイズの過程と操縦技術をその目で見ている。

ナタルがすばやく口を挟んだ。

「なら、もとに戾させて……とにかく民間人の、しかもコードネイターの子供達に、大事な機体をこれ以上まかせるわけには……！」

その顔に明らかに嫌悪が漂つている。
なんといっても今彼らが戦っている相手がコーディネーターなのだから。

ムウはため息をついた。

「そんで？俺にノロクサ出てって的になれっての？・それに、リオンはナチュラルだぞ！」

「それは……しかし、あれほどの操作ができるナチュラルとは言い難いのでは！」

困つて顔を見合わせる二人の前に、ムウはやれやれと肩をすくめ、身を乗り出した。

「あのな。もし戦闘になつたら、あの坊主とリオンがめいっぱいにまで上げた機体の性能そしてそれを使いこなせるパイロットその両方がなきや、やつらにはとても対抗できないぜ」

それは必然的に、ひとつ結論を示していた。

アークエンジュル内に設けられた居住区の一室で少年たちは不安げに肩を寄せ合っていた。そこそこ・・・

「キラ・ヤマト・リオン・R・フラガー！」

戸口にマリューさんと兄さんの姿があった。マリューさんが硬い口調で切り出した話を聞かせてもらつた。要するにMSに乗つて戦闘に出でほしいこと・・・

「お断りします！」

キラは怒りをこめて叫んだ。

「なぜ僕らがまたあれに乗らなきゃいけないんです！あなたが言ったことは正しいかもしない。でも、ぼくらは戦いが嫌で、中立を選んだんだ！ もつぱくらを巻き込まないでください！」

キラならそうするよな、キラは戦争が嫌いだし・・・友人が敵なのだから仕方がないかもしない。

それなら、俺だけでも・・・

マリューさんは辛そうな顔で黙り込んだ。

「わかりました。俺はMSに乗りります。」「

」「」「！？」「」「

みんなが俺を驚いたような目で見てくる。そしてキラは・・・

「リオン、どうして……？」

キラ……すまない、だが、誰かがやらなきゃいけないんだ……

「……すまないな、キラ。お前が戦争嫌いで、その理由でヘリオポリスに来たのは知っている。でも、俺たちは軍の機密を知り、戦争に関わり、その機体で戦闘行為をした。……それにザフトがこの船を襲ってきたらみんなを危険にさらすことになる。だから俺一人でも戦う。キラは兄さん用の〇〇を作ってくれ。それで……」

無理に選択をせむことなんてないんだ。キラにだつてその自由はある。

「そんな……だつたら僕も……」

「落ち着けよ、そんな風に場に流されるような決意ではなく、お前自身が決めたほうがないと俺は思う。それを考えてから答えを出すんだ。いやいや戦闘にでればひりい思いをするだけだから……」

その発言に、キラは黙ってしまった。

「リオンの言うとおりだ。坊主もちやんと決心したほうがいいぜ。坊主が乗らないなら俺用の〇〇頼むぜ」

兄さんもキラを気遣ひよつに続く。

「……少し時間をくださー。」

「わかった」

ＺＳの件は、いつたん、いじでも開かせとなつた。

これからのこと（後書き）

トルが準主人公に昇格しますね。
彼にはリオンとキラを支える・・・いずれアスランも参加しますが・
・

それにムウも準主人公になりますね。
すみませんタイトルも変更します。

細かな設定//ページ構成について（前書き）

これから物語に支障をきたす恐れがあると考え、投稿させていただきます。

世界に”一つの粒子”の理論が同時に存在するのは避けたかったので・・・

細かな設定//ワーゲンコロイドについて

「ズミックイラでは、ミラージュコロイドが使われているのは皆さんがいる」と存じだと思います。ですが本作品ではそこにメスをいれなければならず、事前に報告させていただきます。

確かにミラージュコロイドと呼ばれる粒子を用いたビームサーベル同士では切り結べません。ですが、ミラージュコロイドの性質が完全に理解されていない、または未知の部分があり、まだまだ知らない性質を持っているという設定にさせていただきます。

つまり、あれはこの世界では、ミラージュコロイドと”呼ばれている”物質であることを理解していただきたいのです。つまり、まだまだ使用用途の種類がほかに存在するということです。

何度も言つよつて、まだビームサーベル同士の切り結びはできません。フリーダムなどのザフトの新型ガンダムは可能、そして主人公の乗る機体もできる設定にします。（たぶん皆さんにはお分かりかもしませんが）

そろそろ投稿するので少々お待ちください。

細かな設定[リージョナルプロジェクトにて（後書き）]

まことに、クロスものになりそうなので、説明追加しておきます。

決意の一撃（前書き）

ムウ&リオンのフランガ兄弟vsザフトの赤服組です。

決意の一撃

「アスラン・ザウです！通告を受け、出頭いたしました！」

隊長室に呼び出され、しゃつちょいばつて敬礼するアスランを前にラウはやつたりと指を組み合わせた。

「君と話すのが遅れてしまつたな。呼ばれた理由はわかっているだろ？」「

「はっ・・・命令に違反し、勝手なことをして申し訳ありませんでした！」

「懲罰を課すつもりはないが、話は聞いておきたい。あまりに君らしかぬ行動だからね」

アスランは顔をこわばらせてうつむいた。ラウは立ち上がり、その肩に軽く手を置く。

「部下からの正確な報告がなければ、どんな将として策を誤るものなのだよ。アスラン」

「申し訳ありません・・・。思ひがけないことに動搖してしまいました」

アスランは苦しげに言った。

「あの奪取し損ねた最後の2機に・・・あれに乗つてるのは、キ

ラ・ヤマト、月の幼年学校え私の友人であった・・・・「コーディネーターです。まさかあのような場で再会するとは思わず・・・・・・・どうしてもそれを確かめたくて・・・・」

ラウは黙つて聞いていたが、ややあつてため息をついてみせた。

「なるほど・・・。戦争とは皮肉なものだな・・・・」

彼は机を回り込み、再びシートについた。

「動搖もいたしかたない。仲のよい友人だったのだろう?」

「はい・・・・」

「わかつた。そういうことなら次の出撃には、君を外そう」

アスランは、はつとして顔を上げた。

「そんな相手に銃は向けられまい。・・・私も君に、そんなことはさせたくない」

「いえ隊長! それは・・・・」

彼は激しく首を振り、机の上に身を乗り出した。

「キラは・・・あいつは、ナチュラルにいよいよ使われてるんです! あいつ・・・・優秀だけど、ぼうっとしててお人好しだから・・・・・・気づかずに・・・・それにだから、私は・・・・彼らを説得したいんです! 彼らだってコーディネーターです! こちらの言うことがわからないはずありません!」

「君の気持ちはわかる。 . . . だが聞き入れないときは？」

アスランは息をのんだ。

「そのときは . . . 」

彼は顔を畳らせて言ひよどんだ。だが、すぐニカラウを見つめ、あつぱりと言つた。

「 . . . 私が、撃ちます」

side リオン

さてと、どうするかな？

整備士のマークさんたちと機体のメンテナンスをし終え、俺は艦の中をふらふらしていた。

艦の中は相変わらず人が少ない。

「リオン！！」

トール達が声をかけてきた。

「お前、無事だつたんだな。信号が消えたから本当に心配したんだぞ！！」

「悪いな。キラが吸い出されていつてゐるからな、無我夢中だつた・・・

「

あの時は、内心ひやひやしていた。

「 もうこえま、キラはどつしたんだよ? 一緒にないのか? 」

「 その件なんだけどね・・・ 」

俺は敵側に友人がいる、とこう説明を省いてみんなに話した。

「 それで・・・でもお前はなんであるんだよー? 」

「 じゃあ、誰がこの船を守る? 兄さんだけじゃ守りきれない・・・必然的に俺は戦わなきゃいけない。それに・・・この中にほん避難民やお前らがいるだろ。・・・せぬしかな」

「 もうか・・・お前は・・・戦うんだな・・・ 」

サイが何かこじらを探るような目で見てくる。そして、

「 みんな、聞いたとおりだ。俺達も微力だけど何か手伝つよ。 」

なんだと・・・?

「 お前、ひつつか戦させて、守ってもらひつてばっかじやな・・・俺達もやるよ 」

ミコトリアも叫ぶ。

「 ハリ、いつ状況なんだもの。私たちだって、できることして・・・ 」

「 ・・・ 」

「……………お前ら……………」

「キラは……今はあいつが一番苦しいんだ。だからあいつが戦わなくて済むようにしないとな。」

「まったく……頼りにさせてもいいぜ、みんな。」

「わかった。リオンも死ぬなよ?」

「了解。生き残るぞ」

ピキーン――!

またこの感じ……ザフトか!?

「みんな―― 戰闘の手伝いをするなら早く軍服を着るんだ!」

「え、どうかしたのリオン?」

ミリアリアが尋ねてきた。

「ザフトが来る!! 急いだほうがいい!」

「え、でも、警報は……つてもう……」

俺は、みんなを残して格納庫へと向かつ。

アークエンジールの艦橋に、警報が鳴り響いた。

「大型の熱量探知! 戰艦のエンジンと思われます。距離200! イ

「ローラー——マーク〇二チャーリー——進路ゼロシフトゼロ——」

「横か！同方向へ向かっているー？」

「気づかれたのか？と、みな一瞬ぞつとする。

「だかそれにしては、だいぶ遠い・・・」

ナタルがつぶやく。敵艦はアークエンジンの左舷方向を、並行して航行していた。

「目標はかなりの高速で移動。横軸で本艦を追い抜きます！ 艦特定！ナスカ級です！」

ムウが唸る。

「・・・・読まれてるだ。先回りしてこいつの頭を抑えるつもりだ！」

「ローラシア級はー？」

ナタルはあせつて尋ねた。パルがあわてて計器を操作し、はっと息をのむ。

「・・・・本艦の後方三三〇〇に進行する熱源・・・・いつのまに・・・」

二艦に挟まれた・・・恐怖に満ちた沈黙が、しばしばリッチの空気を支配する。その沈黙を破るようにムウが口をひらいた。

「やられたな。このままではいずれローラシア級に追いつかれて見つかる……。だが逃げようとしてエンジンを使えば、あつと結つ間にナスカ級が転針していくつてわけだ」

マリューもナタルも、呆然と黙り込むしかなかつた。わずかに見えた希望が、今や完全に打ち砕かれたのだ。

「おい！一艦のデータと宇宙図、こっちにだしてくれ」

ムウの声に、一人の女性仕官は我に返る。

「な、なにか策があると？」

マリューの艦長らしからぬ狼狽に、ムウはため息をついた。

「……それをこれから考えるんだよ」

「すみません……」

ブリッジのドアからリオンの学友たちが現れた。

「いつたいどうしたんだ!? 軍服を着ているなんて……? お前らが戦う必要は……?」

「リオンが戦うんです……俺達もやれることをやるんです……!」

「ぼくらも艦の仕事、手伝おうかと思つてさ。人手不足でしょ!? だったら必要でしょ!? 普通の人よりは機械やコンピューターの扱いには慣れています……!」

「しかし、「坊主達、本当にやるんだな?」大尉!?」

「「「「さこーーー。」「」」」

「わかった。頼りにをむけむけいつ。」

「(やつぱり兄弟なのね)」

ミリアリアは大尉の言葉を聞いてそう感じた。

side リオン

「リオン!/? こいつからいたんだ!/?」

「敵が攻めてくると感じたんですね!?! だからあらかじめ待機していました。」

「せうか、ついつてもお前のかん・・・昔からよく当たるよな・・・

そんなやり取りをしつつ、ブリーフィングを終え、リオンはファン
トムに、ムウばぜロに向かった。

ローラシア級、後方90に接近!

艦長、そろそろタイムアウトだ。出るぞ

はい、お願ひします

艦橋のやつとり、ムウとマリューの会話が通信回線から流れてくる。

坊主達にも作戦は説明した

作戦・・それは、兄さんの発案だつた。いざれ追いつかれ、見つか
るである「アーヴィングエンジニア」に、敵の攻撃が集中している間に、兄
さんがゼロで密かに先行し、前方のナスカ級を叩く、といつものだ。

この作戦はタイミングが命だからな。あとはよろしく頼む!-

わかりました。・・・・・お気をつけて

艦橋との通信を終えると、ムウはリオンにも声をかけた。

じゃあな、坊主達。とにかく艦と自分を守ることだけを考えろ

「は、はい！ 大尉もお気をつけて！」

「了解した。」武運を。」

モニターの中で、ムウはにやつと不敵に笑つたあと、通信を切つた。

ムウ・ラ・フラガ、出る！・・・戻つてくるまで沈むなよー

ゼロが、フワ、と落ちるよつて艦から離れた。

そのとき、通信機から聞き慣れた声が飛び込んできた。

リオン・・

「//コアリアか！？」

インカムをつけたミリアリアが、モニターの中で真面目くさった顔をしていた。

以後、私がモビルスーツおよびモビルアーマーの戦闘管制となります。・・・・・ようじくね

最後に照れ隠しのように笑いながらワインクして、後ろからトノムラに「『よろしくお願いします』、だよ！」と、叱り飛ばされる。まつたく、本当に参加してるとほな・・・

装備はエールストライカーを。アークエンジェルが吹かしたら、あつという間に敵が来るぞ、いいな！？

トノムラが念を押す。

「はいっ！」

エンジン始動！同時に主砲発射！目標、前方ナスカ級！

マリューの声と同時に、エンジンが低い唸りを上げた。両舷から、225センチ一連装高エネルギー収束火線砲ゴットフリートMK71がせり上がる。

主砲、撃て！

砲口から、まゆばい光がほとばしつた。まもなく、チャンドラの叫びが通信機から伝わった。

前方ナスカ級よりモビルスーツ発進を確認！ イージスです

!

ミリアリアが、どこか気遣わしげな表情で、インカムに向けて叫んだ。

ガントリークレーンに吊り下げるコニットが機体背面に装着され始める。

ストライクファンтом、接続！ エールストライカー、スタンバイ！ システムオールグリーン！ カタパルト進路クリア！ 発射タイミングをリオン・R・フラガに譲渡します！

「了解」

ハツチがゆっくり開いた。敵はおそらく奪取したMS全てを出してくる。前回の戦闘でもいきなり赤いのがやってきたからな。

「リオン・R・フラガ、ファンтом、発進する！！」

カタパルトがファンтомを射出する。

「ファイエイズシフト起動・・・火器管制ロック解除・・・」

艦橋ではチャンドラが一足早く、敵の機影をとらえていた。

「後方より接近する熱源3！ 距離67！ モビルスーシーです！」

来たか、という緊張がクルーのうちを走る。ナタルの声が響く。

「対モビルスーシ戦闘用意！ミサイル発射管、十三番から二十四番コリントス装填！バリアント両舷起動！目標データ入力急げ！」

正規の兵士たちに混じつてトールたちも真剣な表情でコンソールに向かっている。艦尾で全十一門の大型ミサイル発射口が開き両翼の外側にある丸いプレートから折りたたまれて収納されていたリニアカノンバリアントMK8が突き出した。

戦闘準備が整つた中、敵機の情報分析をしていたチャンドラが息を呑んだ。

「機種特定 これは・・・・・！XナンバーX102、デュエル！ X103、バスター！X303、イージス！X207、ブリッツです！」

「なに・・・・！？」

一瞬凍りついたクルー達の中で、マリューが絞り出すような声で呟く。

「・・・・奪つたGをすべて投入してきたというの・・・・！」

side キラ

僕は、どうしたいんだろう？

警報が鳴り、リオンは戦いに出て行つた。

みんなは管制などの手伝いをしている。

みんなは、戦っている。それぞれの理由と信念で・・・そんなことを考えていると僕は格納庫へと足を運んだ。

僕は、戦争は嫌いだ。本当なら戦いたくなかった。でも、

みんながいなくなるのは・・・もつといいやだー！だから僕は戦う！！ そして絶対に帰つてくるー！ みんなと一緒に生き残るために・・・

「坊主！？ お前さんなんでここにいるんだよ？」

「僕も戦います！ みんなを守るためにー！」

「お前さんをそいつさせた理由はなんだ？」

「みんなと一緒に生き残る。だから必ず、勝ちに行きますー！」

マードックさんはその言葉を聞いて、

「だ、そうだぜ艦長。ストライクも出しますか？」

side out

「ストライクじゃない！？ あの機体は・・・！」

あの機体には確かキラではなく、別の人物が乗っていた機体・・・だが、キラの乗った機体は現れない。

確かめる必要がある。

「その機体に乗っているのは、キラなのか？」

田の前からやがてくるファントムに通信を送るアスラン。

「なんだと！？ キラを知っているのか！？」

こちらの予想とは違うが、キラの知り合いなのか？

「お前はキラとはどういって関係なんだ？」

「キラと同じ学校に通っていた、ただの友人だ！」

「もうつたああ！！」

イザークがファントムの後方からビームライフルを放つ。

「甘い！』

ファントムはビームを最小限の動きで回避し、イザークに接近する。なんて回避の仕方だ・・・ミスをすれば即撃墜だぞ・・・それを・・・

「させるかよ！？・・・って何！？」

ファントムは伏兵の存在を予期してたかのようにディアッカの砲撃を躲し、小型のビームハンドガンで乱射していく。

「おいおい、聞いてねえぞ！？ 黒いののパイロットはほんとにナチュラルか！？」

ディアツカは、紙一重で避けながら、驚愕していた。

「後ろががら空きですよー。」

ミハージュノクロイドを発動し、密かに忍び寄る二コル。だが、それすらも

「見えているんだよー！姿を消したくらいで……！」

二コルのいる区域をハンドガンで牽制射撃をし、簡単にステルスを解除させられる二コル。

「なんで!? レーダーにも表示されないのに……目視でも見えないはずなのに……」

わずか一機で、三機が翻弄されている？ それに行動を先読みされている感じがする……

あれに乗っているのは、本当にナチュラルか？ いや、人間か!?

side リオン

やはり、複数相手だと簡単にはいかないか……スペックでは勝つているが、最新鋭のMSをこうも当てられたら苦しいな。

ブリッツのステルス機能は厄介だが、何分『見える』からな、どういう仕組化はわからんが姿を消したところで俺には何の障害にもならない。

今の俺に四機を討つ力はない。なら……

「ここのおおおおー！」

デュエルがなおも高速で接近していく。なんというかパイロットから怒氣のようなものを感じる。・・・こんなことは初めてだ・・・

ビームサーベルを抜き、切りかかるデュエル。ビームサーベルでは防げないので、シールドで何とか防ぐ。

時間を稼ぐだけだ！！ 攻撃も牽制程度で・・・回避優先だ。

ピキーンー！ 一方向からかー！

デュエルが接近して動きを止めている間にか・・・

「あえて言つておく、読んでいるとーー」

ブリッツとバスターが構えたのを察知したファントムは、デュエルのビームサーベルをシールドで受け流しながら避け、両機の射程から回避する。

「なんで読まれているんだー？ 普通なら気づかないはずなのに・・・」

「お前は本当にキラの友人か！？ 素人じやないぞ、この腕は・・・」

「

「俺は危険を察知してるだけだー！ それとあいつとはヘリオボリスで知り合って勉学に励んでいたよー！ お前らが来るまではなー！」

！

戦闘中に何言つてゐるんだろう・・・まったく、やりすらいな・・・

バスターが94ミリ高エネルギー収束火線ライフルと350ミリガルランチャーレを連射していく。それに続き、ブリッツも50ミリ高エネルギー・ビームライフルを連射し、それに続いてくる。

被弾の可能性はないが、それまでパワーが持つか・・・実際問題としてはまだ余裕はあるが、万が一ということもある。長期戦になればこちらが不利だ。

兄さんはまだなのか！？

s i d e o u t

「ガモフより入電！『本艦においても、確認される敵戦力はモビルスーザー機のみ』とのことです！」

先に打った電信に対する僚艦からの返答にて、ラウ・ル・クルーゼは考え込んだ。ヴェサリウスからはムウのゼロを認められずガモフにも確認させたのだ。

「あのMAはまだ出られん 　　とうことなのかな？」

一人考えつつ、何か引っかかる。・・・・だがしかし、乗る機体がなければ、出撃したくてもできまい。

「敵戦艦、距離630に接近！まもなく本艦の有効射程圏内にはいります！」

その報告に、ラウは顔を上げた。

「こちらからも攻撃開始だ、アーティス

「MS隊が展開中です。主砲の発射は・・・・・」

狼狽するアーティスに、ラウはそっけなく冷笑で応じた。

「友軍の艦砲に当たるような間抜けは、わが隊にいなさい。・・・む
「うは撃つてくるぞ！」

なおもアーティスはなにか言いたそうだったが、命令どおり口を封じた。

「主砲発射準備！照準、敵戦艦！」

アーティスカ級よりレーザー照射！ ロックされます！
た。

「前方ナスカ級よりレーザー照射！ ロックされます！」

目の前のMSに集中していたマリューたちは、その報告に驚き始めた。
ナタルがためらいなく指示をだす。

「ローデンクリン発射準備！ 目標、前方のナスカ級！」

艦長席のマリューがあわててじっと振り返り、その指示を制する。

「待つて！ フラガ大尉のゼロが接近中です！」

「危険です！撃たなければ」ちらが撃たれる！」

ナタルが叫び返す。だが、マリューはうなずかなかつた。

「撃てません！艦、回避行動！」

彼女はきつぱりと言つた。一二〇で浮き足立つて自ら作戦を崩すよう
な真似をしたら、負ける。

敵は前後に二隻、MSの数でも敵わない。奇襲が成功しなければ、
形勢逆転の可能性は万に一つもなくなる。艦長である彼女は、ムウ
を信じなければならないのだ。だが、握りしめたその掌は、じつと
り汗で濡れていた。

・・・もし、ムウが間に合わなかつたら・・・・・。

突然ラウは、はっと頭を起こした。ぞわりと肌を伝つよくな、この
感覚　　すっかりなじみとなつた、彼の身の内の憎悪と、愉悦に
も似た戦慄を呼び覚ますにはいられない、
この感覚は・・・。

「アデス！機関最大、艦首下げー・ピッチ角60ー！」

唐突に、彼の口から命令が飛び出した。アデスは虚をつかれ、ただ
ラウの顔を見るばかりだ。無理もない。彼にこの感覚を伝えること
など不可能だ。だがこの瞬間、その反応の鈍さにラウはどうしよう
もない

苛立ちをおぼえる。そのとき、管制クルーが驚きの声を上げた。

「本艦底部より接近する熱源つーMAです！」

「つおりやあああっ！」

ムウが声を上げながら、最大加速でヴェサリウスに迫る。寸前でヴェサリウスのエンジンが轟音を立て、スラスターを噴射したがもう間に合わない。

ゼロは自動防御装置の迎撃をすいすいとかわし、ガンバレルを展開させ、唸りを上げる巨大な機関部を照準を合わせる。ムウはリニアガンを連射し、ありつたけの火力をぶち込んだ。すれ違いざま機関部が火が噴くのを見て、ムウは「おっしゃあ！」とガツツポーズを作った。そして、すばやくその宙域を離脱した。

ヴェサリウスの艦橋は激しく揺れ、警報が鳴り響いた。

「機関損傷大！推力低下！」

「第五ナトリウム壁損傷！火災発生！ダメージコントロール、隔壁閉鎖！」

クルーの悲鳴のような声が、次々と艦の状況を伝える。

「敵MA離脱！」

その機影を一瞬とらえ、いかりまかせてアデスは叫ぶ。

「撃ち落せーつ！」

だが揺れ、激しく傾く艦の状態では、照準を合わせることもままならない。たつた一機の旧式MAで本陣を叩くとは。小賢しい真似をする、と、歯ぎしりしながら、アデスはラウに振り返った。そこで一瞬、息をつめる。

「ムウめ……！」

ラウは唸り、碎けるほどのかでアーモレストを握り締めていた。仮面からのぞく顔は、悪鬼のごとく憤怒に歪んでいる。アデスはこれまで見たことがなかつた。

「フラガ大尉から通信！『作戦成功。これより帰投する』！」

アークエンジールの艦橋に歓声が上がる。マリューは掌をほどき、すぐに次の命令をだした。

「この機を逃さず、前方ナスカ級を撃ちます！」

クルーな間に再び緊張が戻る。

「了解！ローエングリン一番、二番、発射準備！」

「陽電子バンクチェック临界、マズルチョーク電位安定しました！」

アークエンジールの両舷艦首にあるローエングリンの発射口が開く。

「てエツ！」

ナタルの号令と同時に、特装砲口－エングリンが火を噴いた。その圧倒的な火力。ヴェサリウスの右舷をかすつた。しかしかすつただけ凄まじい衝撃が艦を襲う。ヴェサリウスは完全に戦闘能力を失い、戦線を離脱するしかなかつた。

いまだにファントムに足止めを食つてゐるイザークたち、その戦闘に介入することもできず、迷いながら見守つていたアスランに突然通信が届く。

「ヴェサリウスが被弾！？ 戦闘中域から撤退！？」

信じられないニュースに、しばし呆然としていたアスランだがアーケンジエルから信号弾が打ち上げられ、我に返る。

帰還信号？・・・・・させるとよ！

イザークがファントムに打ちかかる。撤退する前に、せめてMSだけでも落しておきたいと考えたのだろう。

「イザーク！ 撤退命令だぞ！」

「ふるさい！ 腰抜けめ！」

その刹那、すさまじい威力のビームがイザークにかすつた。そしてかすつただけにも拘らず、デュエルの片腕が爆散した。

「なにいい！？？」

「なんだ！？」

突然の攻撃にアスランたちは驚いた。そして、打たれた方角を見る。

そこには距離仕様の装備であるストライクが存在していた。

「キラ！？」

アスランは、呆然としていた。最初キラが現れないのは気がかりではあったが、まさかこのタイミングで・・・

「各機！.. 撤退するぞ！..」

「くそおおおお！..」

「してやられたな、あの機体・.. 最初から止めが目的だったか・..」

「アスランも早く・.. !..」

「わかった・..」

キラ・.. ビビじてお前は地球軍の味方を・..

アスランは歯を噛んだ。

side アークエンジュル

ザフト軍の追撃をかわし、何とか戦闘宙域から脱出したアークエンジュル。

ムウが格納庫に降り立つたとき、ファンтомからリオンがもう出ているが、ストライクのハッチはまだ閉じたままだった。整備士の

マードックが、中に声をかけている。

「どうした？」

そばに寄つていつたずねると、マードックが困惑の表情をムウに向けた。

「いや・・・坊主がなかなか降りてこないねえんで・・・」

「おやおや

すると、唐突にハッチが開き、キラが降りてきた。

確かにキラにとつては、これがほとんど初陣だ。確かに最後の最後での参戦だが、キラはまだ幼いと言える年齢であるのだ。それに訓練もうけずといきなり実戦にやってきた素人なのだ。だからそのズバぬけた能力のために、見落としがちだった。

「もひ、終わつたんだよ、坊主」

「覚悟はしたけど・・・やつぱりまだ震えが止まらないや・・・引き金を引くのって・・・こんなに苦しいんだ・・・」

「そりか・・・だが・・・よくやつたな・・・」

キラは目を瞬かせた。ムウは、父親めいた顔で優しく言った。

「俺もお前もリオンも死なかつた。艦も無事だ。上出来だせ?」

「あ・・・」

彼にやつと笑顔が戻り、緊張がとかれた。

「まさかあのタイミングでやつてくるなんてな・・・決心したのか？」

リオンがキラに近づいてきた。

「うん・・・まだ震えるけど、僕も戦場に出るよ・・・」

「じゃあ・・・改めてよろしくな、キラ!」

「うん!・・・」

ムウはその様子を見ながら、これから向かう先のことを考える。

次はアルテミスか・・・厄介なことになつてほしくないんだけどな
あ・・・

決意の一撃（後書き）

キラはキャラ崩壊を意図してやつていきました。
トルも本編よつねいしい役になるので・・・

疑いの田（前書き）

アルテミス編です。

次はそろつて一月中旬ぐらいになるかもです。

疑いの目

s i d e リオン

アークエンジェルは補給のためにアルテミスに立ち寄り、それを終え次第月基地に行く・・・そんなことをマリューさん達は考えていたらしい。

地球軍、コーラシアの軍事要塞、アルテミス。辺境の小惑星に作られた基地ながら、その傘と呼ばれる、光波防御帯に守られ、未だ、難攻不落の拠点だそうだ。

だが、

「動くなつ――！」

地球軍・・だよな。だけど、なぜ銃を突きつけられているのだろう?

「あああ・・・・・」

「何これ・・? 何なの・・? ねえサイ!?」

フレイは突然の事態に混乱していた。

「・・・・・・・」

キラはサイ達を庇つよつて立ち、銃口を見つめていた。

ふう・・・めったく、やつぱぱつゝなつたか・・・

アークエンジールのブリッジも同じようにアルテミスから来た武装兵によつて包囲されていた。

ミリアリアは銃を突き付けられたことにすっかり怯えてしまい、ノイマン達が彼女を励ましている。

「ビダルフ少佐！　これはどういふことか説明していただきたい！　我々は・・・！」

バジルール少尉が田の前の画面に映る、ビダルフ少佐に食つて掛かる。だが、

「保安措置として艦のコントロールと火器管制を封鎖させていただくだけですよ。」

「・・・封鎖？・・・し、しかし、こんなやり方・・・」

「貴艦には船籍登録もなく、無論、我が軍の識別コードもない。状況などから判断して入港は許可しましたが、残念ながら、まだ友軍と認められたわけではありませんのでね。」

確かに一理あるね・・けど、本当の目的はあの一機だらうな・・・

ムウはせつ思ひつつ、本当は別の目的があるのではないかと考える。

「しかし・・・・・・！」

それでも食不下がらない少尉。

「軍事施設です。」このへりのことは、理解いただきたいが？」

「…………」

その間に、彼女は口をつぐんでしまった。

「では、士官の方々は私と同行願いましょうか。事情をお伺いします。」

さてさて・・・どうなることかねえ・・・この船と俺たちは・・・

クルーの多くが平静を失っているなか、彼はいつも通り冷静だった。

side アークエンジュル

ムウ達が艦を降りた中、残りのクルーは一か所にまとめられていた。

「どうなってるんだ?」

「私達はここで降ろしてもらえないんじゃないのか?」

「どうして何の説明もない……」

避難民たちは、なおもざわづいていた。

「ゴーラシアって味方のはずでしょ? 大西洋連邦とは、仲悪いんですか?」

サイがこの状況を推論してトノムラに尋ねた。

「そういう問題じゃねえよ。」

「……識別コードがないのが悪い。」

バルがおっしゃったと答える。

「それって、そんなに問題なんですか？」

トルルが質問する。

「どうやらねえ……。」

チャンドラー。世。

「本当の問題は、別のところにありますだがな。」

マードック整備士。

「……ですね。」

ノイマン達が苦々しい顔をする。

「「はあああ……。」

キラもリオンもうすうす次に何が起きたのか、予想できていた。

僕たちのM5のデータ……これが一番だらうな……。

side ムウ

そして現在ムウ達はアルテミスの中で、ビザルフ少佐と対面していた。

「ようこそアルテミスへ。」

ムウはいつも通りの敬礼（リラックスした姿勢）、そして緊張で固まっている一人は表情も敬礼も堅かつた。

「マリュー・ラミアス大尉、ムウ・ラ・フラガ大尉、ナタル・バジルール少尉か・・・なるほど、君達のＩＤは確かに、大西洋連邦のものようだな。」

「お手間を取らせて、申し訳ありません。」

内心では全く思っていないムウ。

「いや、なに・・・輝かしき君の名は、私も耳にしているよ。ヒンティミオンの鷹殿。クリマルティ戦線には、私も参加していた。」

「おや、ではビラーード准将の部隊に？」

「そうだ。戦局では敗退したが、ジンを5機落とした君の活躍には、我々も随分励まされたものだ。」

「そうですか・・・」

「しかし、その君が、あんな艦と共に現れるとはな。」

話の内容を今回のことごとく変え、表情を変える少佐。

「特務でありますので、残念ながら、手綱を申し上げる事はできませんが。」

後ろの二人は、まだ固まっていた。・・・まあ新米艦長と副官だし

な。・・・」いつもんは慣れだな。

「なるほどな。だがすぐに補給をとこうのは難しいぞ。」

「ムウはその言葉に反応しようとしたが、これまで一回もしゃべらなかつたマリュー大尉が口を開いた。

「我々は一刻も早く、用の本部に向かわなければならぬのです。まだ、ザフトにも追われておひますので・・・ですから・・・」

「ザフト?」

すると少佐はモニターを開いて、ムウ達に見せた。モニターにはローラシア級二隻が表示されていた。

「ローラシア級?」

ナタルの目つきが変わった。

「見ての通り、奴等は傘の外をウロウロしてござるよ。先刻からずっとな。まあ、あんな艦の二隻や二隻、こことことことことはない。だがこれでは補給を受け出でられまー。」

だが、少佐は意地の悪い笑みを浮かべながら肩をすくめる。

「奴等が追つているのは我々ですー」このまま留まつ、アルテミスにまで、被害を及ぼせては・・・

「俺としちゃ、やつれと出て行きたいんだけどな。・・・あいつらがリオンたちになんて言つかわからんしな。」

「はつはつはつはつは！被害だと？このアルテミスが？奴等は何もできんよ。そして、やがて去る。いつものことだ。」

それでも彼はムウの言葉に耳を貸さうともしない。

「ともかく君達も少し休みたまえ。だいぶお疲れの様子だ。部屋を用意させる。」

「…………アルテミスは、そんなに安全ですかねえ？」

「あー、まるで母の腕の中のよつこな。」

その発言は、アウトだと俺は思うんだけどなんでもみんな突っ込まないのかな？ その年でそれを言うのは・・・

「いや、不明艦といつても、この扱いは不当です。」

ナタルが不満を爆発させていた。

「仕方ないだろー？連中は今、我々を艦に帰したくないんだからさ。

L

俺つていつも「ひいづボジションだな・・・いい加減ここ譲りた
いんだけど・・・

「なんですかー！？」

驚くような」とかいな船長・・・

「それに・・・俺が気になるのは、連中がこのアルテミスだけは、絶対に安全だと思いつこんじまつてることだよ。・・・」

「んじゃ、いつおとされるかわからなーいな。」

side ザフト

「傘は、レーザーも実体弾も通さない。ま、向こうからも回りこじただがな。」

ゼルマン艦長が状況を見て、手をこまねいていた。

「だから攻撃もしてこないってこと? バカみたいな話だな。」

ディアツカがあきれた口調で言つ。

「だが防御兵器としては一級だぞ。そして重要な拠点でもない為、我が軍もこれまで手出しせずに来たが、あの傘を突破する手立ては、今のところない。やつかいなところに入り込まれたな。」

苦々しい顔をする艦長。

「じゃあどうするの? 出てくるまで待つ? フツフツ・・・」

「ふざけるなよディアツカ! お前は戻られた隊長に、何も出来ませんでしたと報告したいのか?」

「まあ、作戦とかいい方法がないようじゃ、仕方なくねえか・・・」

ディアツカはそういう一つも攻略法を考える。

「レーダーに映らずに無防備な時に侵入するとか・・・あ! おい

「コル!」

「艦長、傘は常に開いてるわけではないんですね?」

「コルはディアツカの考えていることを理解し、(同時に思い付いたのだが) 質問する。

「ああ、周辺に敵のない時まで展開させておらん。だが閉じているところを近づいても、こちらが要塞を射程に入れる前に察知され、展開をされてしまつ。」

それを聞いてディアックとニコルは満面の笑みを浮かべる。

「な、なんだお前ら……？」
イザークはまだ理解できていないうつだ。

「僕の機体、…あのブリッツなり上手くやれるかもしれません…」

「何だとおーーー??」

「……ていうかなんで驚いているんですか？　一度使いましたよ、あれ……」

ニコルの笑みは、引きつっていた。

そしてニコルが出撃した後、

「…………」

「…………おいイザーク？」

「…………なんだ…」

「いや…………やっぱいいわ…………」

微妙な空気が流れていた。

「Jの艦に積んであるモビルスーツのパイロットと技術者は、どこだね？」

あれがアルテミスの・・・

「パイロットと技術者だ！この中に居るだろ！」

・・・やっぱり用がありますか・・・狙いは言つまでもなくストライクとファンタムの戦闘データとOHTとか・・・勘弁してくれ。

「何故我々に聞くんです？」

ノイマンさんが副官に尋ねた。

「なにい？」

「艦長達が言わなかつたからですか？それとも聞けなかつたからですか？」

「なるほど。そつかー君達は大西洋連邦でも、極秘の軍事計画に選ばれた、優秀な兵士諸君だったな。」

「ストライクとファンタムをどうしようつてんです？」

ノイマンの目つきが鋭くなる。

「別にどうもしゃしないさ。ただ、せつかく公式発表より先に見せていただける機会に恵まれたんでね。パイロットは？」

「フラガ大尉ですよ。お聞きになりたいことがあるなら、大尉にどうぞ。」

マーデックさん達が俺達を庇ってくれている。でも・・・

「先ほどの戦闘は一いちいちでもモニターしていた。ガンバレル付きのゼロ式を扱えるのは、あの男だけだとこうことぐらい、私でも知つていいよ。」

「離して…！　イタツ・あいつ・・・」

「ミコトアリアー！」

トルが駆け寄りつとひぬが、チャンバラにせじ止められた。

「やめろ…！」

キラが激昂しかかる。だが、

「坊主…」

今度はマードックさんがキラを止めた。・・・しかしあれではミコトアリアが…！

「・・・・・」

「女性がパイロットといひともなこと思ひが…」の艦は艦長も女性といひことだしな…・・・

「こいつたーい！」

「やめろ！」言ひこんだらうが…・・・」の変態があ…・・・

もう我慢ならん。

「なんだ貴様は…！」

「坊主…！」

「俺があのMSのパイロットだ…！　彼女から手を離せ…・・・」

「ボウズ、彼女をかばおつといひ心意氣は置つがね…あれは貴様のう様なひよっこが扱えるようなもんぢやないだろ？ふざけたことをするな…！」

男が俺に殴り掛かつてきた。・・・そんな隙だらけの・・・!?

「・・・うわっ・・・うおお・うひょあ!」

キラがマードックさんの制止を振り切り、男を殴りつけたのだ。・・・
キラ・・最近ずいぶん男らしくなったなあ・・・

「・・・おおい、これはめっちゃまつたなキラ」

「そうだね。でも君はなんでうれしそうなの?」

キラが不敵な笑みを浮かべながらわかりきつたことを言つてくれる。・・・
・聞くまでもないだろ!・・・

「お前がいなきや、俺が殴つてたな。」

「司令!..」

ボスが殴られたことに驚いていたが、あわてて俺達に銃を向けてきた。

「へえ、やる気か?」

「・・・・・・」

「ひつ・・・・・」

本能的に察したのかな? 少し怖気づいた男。

「キラ！ ロオン！ 止めろ！ 抵抗するな・・・」

「止めてやる！ うわー！」

あわてて副官と俺たちの間に割つて入ったサイだが、副官に殴り飛ばされた。

「うわああー……サイー……ちよっと止めてよー！ キラとロオンが面つむる」とは本当よー。その子達がパイロットよー。」

「なつー！？」

「待つてフレイー！ー」

「貴様らー！ いい加減にしないかー！」

いや、お前もいい加減にしなよ・・・それよりも・・・

「フレイは黙つてろー！ー」

しかし冷静さを・場の空氣を読む!ことを忘れた彼女は・・・

「嘘じやないわよー！ だってキラは、その子、コードィネイターだものー！」

その瞬間、場の空氣が凍つた。・・・なんてことを言つんだ・・・

「・・・コードィネイター・・・」

クルーのみんなは頭を抱えていた。・・・どうしたよ？

「なら貴様も『一テイネーター』か？」

「知るかよ変態」

「貴様！… いい加減にしないか！…」

「なら、女の子に暴行を働き、こちらの神経を逆なでするような行為・・・兄さんのような人は一握りだといふことがよくわかりましたよ！」

「兄だと・・貴様名は・？」

「リオン・R・フラガ。フラガ大尉の弟だ。俺がいなきやファンタムは動きませんよ。」

「フラガ？・・・ほう・・・・貴様、エンデュミオンの鷹の片割れが、いいだろ？・・・連れて行け。」

「ふん」

「・・・」

キラはさつきから怖い顔したまま。ま、俺も人のことは言えないけどね。

side トール

「なんであるなこと言つんだよーお前は・・・」

友達を売るなんて・・・それに状況わかつてんのかー?」

「だつて・・・でも本当のことじゃない・・・」

「キラがどうなるかとか、考えないわけ?お前つてー・

「お前お前つて何よー!キラは仲間なんだし、ここは味方の基地なん
でしょ!?ならいいじゃないのー!」

・・・もうこいや、こいつに何言つても無駄だな。

side キラ

「OSのロックを外せばいいんですか?」

あれから僕たちは格納庫でストライクとファンタムの「ロックペッシャ
にいた。

「まずはな。だが君にはもつとこうこうなことができるのだろ?」「
何がです?」

「例えば...こいつの構造を解析し、同じものを造るとか・・・逆
にこいついたモビルスーツに対して有効な兵器を造るとかね。」

「僕にはそんなことをする意思はありません。僕は民間人です。そ
んなのはあなたたちの仕事でしょ!?」

「だが君は、裏切り者のコードネイターだ。それにMSに乗つて
いる時点で民間人とは言えないだろ?」

え・・・ひ・・・ぎり・もの・・?

「・・・裏切り者・・・?」

「どんな理由でかは知らないが、どうせ同胞を裏切ったんだろう?
ならばいろいろと・・・」

「・・・違うー・・・僕はただ・・」

守りたい人がいるだけで・・・

「地球軍側に付く『コーディネイター』というのは貴重だよ。なに、心配することはない。君は優遇されるさ。コーラシアでもな。・・・さらにはフラガ大尉の弟か・・・さすがはあの血筋の出だな。」

「血筋？」

「フラガ大尉と同じ・・・いや、彼をはるかに上回る空間認識能力・・・そして『コーディネーター』並みの戦闘能力と技術・・・兄弟そろつて化け物だな。」

「彼は化け物じゃない！！」

彼は優しくて、僕よりもかっこよくて、強い、紛れもない人間だ！

「案外、彼も『コーディネーター』いや、それらを超越した存在かもしれないな。」

そういつて彼はストライクから降りて行つた。

side リオン

ピキーンー！

この感じは・・・

「おい、あんた！！ 早く降りてくれー！ ザフトが来るー！」

「なにを言つている？ レーダーには確認されないが・・・」

ミリージュノーロイド搭載の機体が確かに・・・ブリツツ――

その刹那、アルテミス内の警報が鳴り響いた。

side ムウ

く、やはり敵襲か！？

「チイー・やられたな！」

うわあー！今の爆発で！部屋に亀裂が入った！空氣があ！

叫べよー、ドア開けさせるんだ！」

わざとらしく大声を上げることにした。

「はつー！キヤーーー！助けて！死んじやつうー！」

「ぬわあー！早く開けてくれ！」

ひゅー、いい演技だねえ・俺なりすぐに駆けつけるぜ。

「キヤーーーー！早く助けてーーー！」

「・・・・・・・」

バジル ル少尉に期待しちゃ・・・いけないか・・・少し残念・・・

「出してくれーー！うわああ・・・」

「あーー！来て！早くーー！」

声が届いたのか、ドアが開けられ警備兵がやつてきた。・・・おし、隙有りい！――！――！

「あらよつとーー！」

「うわあ・・・ーー？」

「大尉！？」

まあ不可抗力なんだ、少尉。 そう睨まないでくれ。

「おい、どうした？」

「ふん！」

「ぐべらつー！」

「急ぐんでねー！」

「確かに、アルテミスと心中は『めんね！』

「…………大尉…………はああ」

「美人がため息とかしちゃいけないぜ」

「大尉！！！」

美人に睨まれるのはもつときついな……

side リオン

「どうすれば……ふげらつー。」

「悪いな、このままおとされるわけにもいかないからな」

ファンタムを起動させ、アークエンジュルを守らないと……

あたりはブリッツの攻撃によって崩壊しかけていた。……あと少し早く気付けていたら……

「キラ！ そつちはー!?」

「……何とかストライクで脱出したよ。ソードで出るーー。」

元気がない……ようじる。また変なことを言つたのかあの変態……

ピキーン！

「やいかー！」

「くつ！ やっぱり黒いのに感知される・・・」

ブリッツがステルスを解除し、攻撃を仕掛けってきた。

「キラ！！ お前はアーケンジールに早く合流しろーー。」

「うん、わかった。必ず戻ってきてね。」

ストライクがアーケンジールのほうに向かったのを見て、ブリッツが追撃しようとする。

「行かせない！」

ビームライフルを連射し、ブリッツの進路を阻む。

「くつ、射撃も正確になってる・・・だけどー。」

3連装ミサイルを発射し、ビームで畳み掛けるブリッツ。

「そんな攻撃で！」

「やつーーーーー！」

ミサイルにビームを当てる・・・まさか！？

「はああああーーーーー！」

爆風で視界が悪くなる。その状況でビームサーベルで切りかかる、
目晦ましか。だが！！

「そんな小細工で……！」

ファントムは、最小限の動きで、ブリッツの横振りを屈んで避け、ビームサーベルでカウンターを仕掛ける。

「もう少しちゃんとやる……！」

二方向からのビーム、新手か！？

「二回も！ 無事か！？」

「今日はおとこしてやる……！」

デュエルとバスター……この狭い空間では、不利だな。

「アーチェンジエル！ 聞こえますか！ 現在の艦の状況は！？」

「キラ君と合流して、今アルテミスを脱出してるわ。あなたも急いで……！」

「了解……お前の策……」ちらりと使わせてもう少しだ……！」

ファントムは、アルテミスに手当たり次第に攻撃をし、爆風を絶えず生み出す。

「え、何を！？」

「……」

「「れじゅあーー。」

ところよつ、あたりが勝手に崩壊するんでやる」ことなどないけどな。

「リオンー！」

キラがアグニで援護射撃をしてくれた。

「ああ、レジラリオン。すぐに帰投する。」

その後俺たちはアークエンジェルに帰投し、ザフト軍の追撃をかわしきつた。

「リオン、僕は・・・・・

「どうした、キラ？」

「僕は・・・・・

まだ元気がないか・・・・あの変態め・・・・

「・・・・・あの変態になんか言われたんだろ？ ローディネーターについて・・お前がどんな存在だらうと知らなこよ。お前はお前だろ。お前の意思でここにいるんだる？」

「・・・・・うん」

「ならいいじゃないか。人種とかにこだわったりきりがない。」

「・・・うん。そうだね・・・・」

「じゃあな、俺は部屋で休んでおくよ。さすがに疲れたよ今日は・・・」

アルテミスでは、全く休めなかつたな。といつより補給は少ししかできていない。これからどうするべきか？

まだこの艦の航行は先行きが不透明だ。なんか明るいことないかなあ？

と思つたあと、そんな人が来てしまつたんだよなあ・・・うん。

疑いの田（後書き）

いつも、『J愛読ありがとうございます。これからもスランプにめげず、頑張って完結を目指しますー！』

突然ですがアンケートです

傍観者 とつぜんですみません

リオン 作者がとある装備を見て興味を抱いてしまったので急遽聞くことになった。

キラ えっと、それで今回のアンケート内容ですが、「I・W・S・P」の使用の有無について、もしくはどのように運用したいか、たとえば、ある程度無駄と思える装備を減らしたり、追加したりするなどです。

傍観者 まあ、エールを使おうかな、と思つたんだけど、エールの予備パースはあるにしても一つの兵装がいくつかあるのは不自然ではないかと思うんですね。

リオン 作者が言いたいのは、ヘリオポリスで収容した兵装が三つだけではないのかと考えてしまつたためだ。・・・俺は別にエールでも構わないが・・・

キラ リオンはこう言つてるけど、作者がそれではノワールのフレグにビビが入るのでダメと・・・

トール キラ！…ネタバレはいけないよ…!

キラ 「…」めん トール…今はなかつたこと…・・・はならないのでスルーしてもらえないでしうか…・・・

リオン まあなんだかんだで読者の皆様から意見を募集します。今

浮かんでこむ案は四つ。

? そのまま使用

? 単装砲のみの高速機への移行

? エールなどの兵装が複数予備があり、置物としておく

? ?のようにほとんどのページせずに兵装をページした分に、新たな兵装をつける

リオン 以上の四つだ。

ムウ よりやく出れた・・・作者に素で忘れられていたじゃないか
!! ビツして言つてくれなかつたんだ!?

ムウ以外 あ・・・・

ムウ あ、じゃないよ!! まったく・・・これでも主人公の兄貴
なんだぜ・・・

リオン 「めん、兄さん。 もつ作者のアンケートの内容言ひか
つたし・・・終了なんだけど・・・

ムウ なんだと!? それ酷くないか!!-- ちよつと作者、いひち
で話しないか?

傍観者 あ、ちよつとまつ・・・

作者が連れていかれました

キラ　・・・・・えつと、それではこれからも「機動戦士ガンダム
SEED 可能性を抱く者」よろしくお願ひします。

リオン 最後しまらないね・・・

トール 激しく同意・・・・えつと期限は今月の二十六日までです。

結果発表です（前書き）

遅れましたがついに決まりました。?という方が多かつたですが、ファンタムはルージュのようにパワーは出ません。（そんなことになれば、機体を変える必要がなくなつてしまつので）少し不平が出るかもしれません、一部の意見を参考にさせていただきました。

結果発表です

傍観者 すみません、ちょっと帰省してたんですが、パソコン忘れてて・・・

リオン まあ、携帯があるんじゃないか？

傍観者 いや、通信料半端ないし・・・

キラ そうだよね・・・いくらかかるかわかったもんじゃないからね・・・

リオン ・・・ そうだな、払えない額ならほとどりひとつもないしな・・・

傍観者 えっと、結果発表です。みんなの意見とは少し違う、現実的なものにしてました・・・そこはお詫び申し上げます。

トール E・W・S・Pはレールガンとガトリング付きのシールドがエネルギー食いつわ、デットウイトだので、取り外さなければなりませんでした。

キラ いくら強化されていようと云々、ルージュほどパワーでないしね・・・

リオン またネタバレしてるやん、キラ・・・

キラ うわ、しまった！！ また・・・

トール でも、あれは出で、ビのびのび・・・だから前回比べ
やまくはないだろ

リオン 兄さんまた呼ばれてないね・・・

トール なぜ俺が呼ばれてムウさんが呼ばれてないんだろ?

ミコアリア ヤッホー! 遊びに来たわよ!

リオン まかかのミコアリア参戦!?

ミコアリア (ピッハーハ) ちよつとリオン・・・あっちで話
しない?

リオン あ・・・ちよつ・・・

リオンちゃんとミコアリアさんが退出しました。

トール ・・・・・・・

キラ ・・・・・・

傍観者 ・・・・・・・!

ムウ まあ前もりちよつとちよつと話さないか?

傍観者さんも退出しました。

トール ・・・・・・・

キラ 僕ら一人になつたね・・・・・

トール え、えっと・・・これからもこの作品をよろしくお願いします。

結果発表です（後書き）

本当に？を選んでいただいた方には申し訳ありません。これからは読者の期待を裏切らないように頑張っていきます。それではまた近いときに話を投稿するので今日はこの辺で・・・

おめでたぬい・・・・・(前書き)

今年度初のお話です。明けましておめでたうござりますーー。

生あるために・・・・

side ムウ

「再度確認しました。半径500㍍、敵艦の反応は捉えられません。完全にこちらをロストした模様。」

「・・・ハア・・・」

敵の追撃を何とか振り切ったアークエンジュルのクルー、並びにラミアス艦長はため息をついた。

「アルテミスが、上手く敵の目を眩ませてくれたってことかな? だったら、それだけは感謝しないとね。」

やたら胸糞悪いことばかり起きたが、最後は俺たちの命を繋ぎ止めたわけか・・・といつても俺は感謝する気にはなれないな・・・

「しかし・・・」

バジルール少尉がつぶやく。・・・わかっちゃいるよ・・・まだ・

「敵の追撃が一時的とはいえ、逃れたのは幸いだけど、こちらの問題は何一つ解決していないわ」

このままじゃ物資が持たないぞ・・・かといって補給できる場所はどこにあるか・・・

side トール

「えーー・どうしても？」

「俺は今、『』の女の無責任さに少しイラついている。

「そんなん……どうしても、とか言わると困ります。でもやつぱ、謝つといった方が良くない？この場合。」

サイ……まあ婚約者だからあまりきついことは言えないかもしね。ないけどまあ……どう考へても謝るべきだろ？

「……お前の一言のおかげで、あいつがこんどもない田に遭つたことは事実だぞ。」

「……でも……私はただ……」

「あれで事態が好転するとしても考へていたのか！？ 僕達は慣れるけどさ、あいつがコーディネイターだつてのは、『テリケートな問題なんだぞ。』この状況であんな不用意なことを……」

「とにかく、言つだけは言つときなよ。』めんてさ。』の船の中で氣まずいでしょ？顔合わした時とか……」

「……うーん……サイがそんなに言つたら……言つてもいいけど……」

「……」

……なんだよこの上から田線は……迷惑をかけたのはそっちなのに……

「そ、そういうえばさ。補給の件つてどうなったのかな？」

たまらずカズイが別の話題に変える。自分のことじゃないのにすごいビクビクしてるな……

「んー。アルテミスでは結局、補給つて受けられなかつたんだろ？ んー……ザフトもまだ、追つてくんのかなあ……」

サイが答えのない答えをカズイに返す。

お先真っ暗じゃねえか！！

一日後

s i d e リオン

「…………」

「…………」

「…………」

トルとキラは答えない。といつより何かを考え中のようにだ。

「キラ、お前ならこの状況ビリする？ 何か打開策が思いつくか？」

「

「特に水について意見がほしいね……機体の整備にあれほど手間取るなんて……」

「すまん、俺にもまだ……確かに洗浄機が使えたのは結構きつな。こんなんで敵に攻撃されたらひとたまりもないな」

「初めて整備の手伝いをしたけど……悲惨だったよな……トルとキラは水が使えないという環境下で敢行した整備のおかげで疲れ切っていた。むろん俺もだ。

「…………」

俺たちのため息が重なる……前途多難すぎる。何かないのか……何か……

「・・・・・トールに、キラに、リオン?」

ミコアリアが周囲に重いオーラを出していた俺達に声をかけてきた。

「ミコアリア? どうしたの?」

「・・・・尋常じゃないほど暗いオーラ出してたから心配したの。・・・やつぱり物資の不足は最大の敵よね・・・それに・・・」

「それに・・?」

「トールがまだあるのか?という顔をする・・・これ以上問題があつたらかなりきついって・・・」

「フレイがシャワー浴びれないから少ししつねせいかも・・・」

「ストレート・・・」

「うふ、ストレート、だね」

「・・・・ストレートに言い切つたな・・・」

ミコアリアがここまでストレートに言つとは思わなかつた。

「戦時下なんだから仕方ないのに何自分勝手なことを言つてるのかしら? みんな苦しいけどそれなりに工夫してるのにね。一人ともお疲れ様、トールも手伝つたんだよね、洗浄機がない影響つてそんなにすごかつたの?」

「聞いてたんだ・・・ああ、水が使えないからスムーズに洗浄できなくてさ・・・整備員総出で機体を吹いていたり、通常点検を行つたりしたからさ・・・」

トールが説明し、

「あれは戦場だつた……」

「右に同じだね……」

俺達も一番あの状況を表現できる単語を一言述べる。

「そりなんだ……ねえ、私も何か手伝えないかな?」

「え、ミリアリア?」

「だつて、キラやリオンはわかるけど、トールも参加しているんでしょう? だつたら私も手伝いたいの。お願ひ……」

「ミリアリア……」

はい、二人だけの世界に行きやがりましたか、このリア充め……

・
「ホント、いいガールフレンドだなチクショウ……」

「リ、リオン? 顔が笑つてないよ……」

いいなあ、こんなできた女の子が恋人だなんて……くつ、う、羨ましくない……とは言わないぞ……

「出会いがほしい……」

「リ、リオン……だ、大丈夫だよ……リオンなら……」

キラが慰めてくれるけど、あまり意味がないよ~!!

ヘリオポリスでもさ、キラのほうによく女の子集まるんだよなあ。

俺は次元が違うとか、荷が重い、とかそういう感情もたれてた(ト

ールが教えてくれた) らしいので、春が訪れなかつた。

「せめてキラより先に彼女を作る……それまで死なねえ……」

「リオンが壊れた……」

キラ……最近男らしくなつたけど、言動も容赦なくなつてきたよ
な……

そこへマコニーさん達がやつてきた。

side アスラン

「御同道させていただきます、ザラ国防委員長閣下。」

「 礼は不要だ。私以外に、このシャトルには乗つていない。いい
かね、アスラン。」

「分かりました。父上。お久しぶりです。」

本当に久しぶりな気がする。今まで足つきの追跡ばかりをしていた
からな……

「リポートに添付してあつた君の意見には、無論私も賛成だ。問題
は、奴等がそれほどに高性能のモビルスーツを開発したといつどこ
ろにある。バイロットのことなどどうでもいい。」

「・・・それは……」

キラのことは・・・書かれていない、ところがとか・・・

「 その箇所は私の方で削除しておいた。」

「 ありがとうございます。閣下ならやつをつしゃつてわぬと黙
つておりました。」

「向こうに残してしまった機体のパイロットも『一デイネイター』だつたなどと、そんな報告は穩健派に無駄な反論をさせる時間を作りだげだ。」

「君も自分の友人を、地球軍に寝返つたものとして、報告するのは辛かるわ。」

「あつ・・・いえ・・・あの・・・ですが」

「奴等は、自分達ナチュラルが操縦しても、あれほどの性能を發揮するモビルスーツを開発した・・・そういうことだぞ。分かるな・・・

・アスラン。」

「・・・・・はい。」

父上の氣づかいには感謝しなければ・・・それにあいつとは、なぜ連合に味方をするのか・・その真意が知りたい。そして・・・

「我々ももつと本気にならねばならんのだ。早く戦いを終わらせる為にはな。」

あの黒いのはいつたい誰が乗っているのかを・・・

あの機体とパイロットには「こと」とく作戦を失敗させられている。まるでこちらの動きを察知しているかのように・・・

艦に帰つたら、みんなでシユミーレーションをしなければいけないな。そうじやないとあれは落とせない。

その前に、緊急査問委員会にクルーとともに出席しなければいけない。・・・・・ヘリオポリスの件、それとあの試作機のことについても・・・・・

アスランは、クルーとともに議会へと足を運ぶ。

「補給を？」

トールの目が見開いた。

「受けられるんですか？」

キラとトールは整備が楽になることを夢見ているのか、目が輝いている。

どこかはわからないけど、これで整備のほうもスムーズになるね。それと新ストライカーパックに使える資材があるかもしれない。

「それは本当なの、兄さん？」

「受けられると書つか・・・まあ・・・勝手に補給すると書つか・・・」

「私達は今、デブリベルトに向かっています。」

なんですと・・・！？

「でふりべると？？？・・・」

「ちょっと待つて下さい！まさか・・・」

まさか、デブリ帯の中に眠っている燃料や資材を・・・

「君は勘がいいねえ～。・・・俺達も不本意なんだけど・・・」

ムウさんが申し訳ない表情を浮かべながら、答える。

「デブリベルトには、宇宙空間を漂う様々な物が集まっています。そこには無論、戦闘で破壊された戦艦等もあるわけで・・・」

話が進まないのでバジルール少尉が話を引き継いだ。・・・こんなこと前にもあつたよね。

「まさか・・・そこから補強するんですね・・・でも、そこに眠っている人もいるかもしないんですね・・・」

死者のことを考えたミリアリアはつらそうな顔をする。いや、むしろ死者に申し訳なさそうだった。

「仕方ないだろ？ それでもしなきゃ、二つちが保たないんだから・・・

・

「あなた達にはその際、ポッドでの船外活動を手伝つてもういたいの。」「！」

「あまり嬉しくないのは同じだ。だが他に方法は無いのだ。我々が生き延びる為にはな・・・」

「喪われたもの達をあさつ回ろうと言つんぢゃないわ。ただほんの少し、今私達に必要な物を分けてもらおうというだけ。生きる為に。」

「仕方ないよな、ミリアリアは・・・無理してつき合つ必要はない。」

「私も行く。クルーのためなんでしょう？」

「じゃあ俺とキラはMSで大型の資材の回収、あと護衛もかねて出る。それでいいな、キラ？」

「そうだね、気は進まないけど、やるしかないね」

この後の出会いは、僕らの運命に大きな影響を与えるんだ。そして、最初は乗り気ではなかつたが、渋々ながらそれを引き受けたことになつたらしい。

その後、サイ達にも話をして協力を求める艦長たち。・・・当然、「そういえば歯獲したジンにはだれか乗らないのかな？」

とキラが今まで俺たちの中では忘れていたことについて疑問をつぶやいた。

あ、そういうえばあの時ジンを鹵獲したな。そしてパイロットは今、拘留されていると聞いていたが・・・だが、あれはコードィネーター用のOSだから乗ることが可能なのは俺とキラしかいない。

「そうだな、帰つたらOSを作らないか、キラ？ もしかしたら兄さんが乗れるかもしないけど・・・」

「そうだね・・・それとマードックさん達と作つてアレの改造は進んでいるの？」

「基となるベースはあるけど、如何せん資材が少ないし、兵装に問題があるからな。まだ完成には程遠いよ・・・」

アレというのは、俺用に考えた新しいストライカー・パックのことだ。このアークエンジニアには、ソードストライカー、ランチャーストライカー、ヒールストライカーの三種類しか兵装がない。キラの得意な戦闘スタイルは高い機動性によるもの・・・つまりヒールが一番合っているのだ。

まあ確かに俺のファンタムは、ストライカーパックに頼らなくともなんとかやれるかもしれないが、それではエネルギーが心許ない。

そこで俺とキラが考えたのは第四のストライカーとされていたI・W・S・P (Integrated Weapons Strike Pack) の改良、軽量化だ。

エールストライカーの機動性、ソードストライカーの格闘能力、ランチャーストライカーの火力を一つのストライカーパックに統合す

る目的で設計されたらしいが、構造の複雑化によるコストの高騰やパック本体の「ティドウェイトによる姿勢制御の悪化に加え、兵装と制御用電装系の重装備化による消費電力の増加、PS装甲の作動時間大幅に短縮すると言つ問題が発覚し、アーケンジエル内にまで収容されではいるが使い道のないガラクタに成り下がってしまったのだ。

俺から言わせてもらうと、現時点では欲張りすぎだと思つ。本当に見ていてバランスが悪い。ちゃんとしたフォルムも考えずにいいとこ取りをしようとしたのが裏目に出来てしまったのだ。

そこで、無駄と思われる兵装のページから考えてみたのだ。

まずは試製9・1m対艦刀。全長9・1mの実体剣で対艦刀と銘打つてあるけどシユベルトゲベルの様にビームの刃を発生させる機能は持っていない。アーマーシュナイダーと同じ材質で、マウント状態では両腰部に柄が来るのだが、ビームサーべルを持つファンタムには意味のない兵装・・・・と言いたいが、対艦刀はザフトのヴァサリウスなどを擊破するために必要なので残しておく。

ガトリング砲は機体の重心を悪くするので没。ブーメランもコンバインシールドの表面に装備しているため邪魔でしかない。

115mmレールガン。遠距離攻撃用のレールガンなのだが・・・。パックパックに搭載され、肩越しに目標を射撃する兵装で、同軸上にマウントされた高精度照準センサーにより、超長距離射撃時の命中精度を向上させている。かなり迷ったが、パックパックからパージして一つの兵装にして運用するというのが、キラの提案だ。何しろ、この兵装が一番エネルギーを食ってしまうのだ。それに実戦

で使うのであればランチャーがあるから、はたして使つとせぬやつでくるのか・・・・

最後に105mm単装砲。元々レールガンと並行するよつて肩部にマウントされる单装砲で、レールガンの使いづらい中近距離での射撃用とされていた。

ガトリング砲にブーメランはページして、レールガンは兵装の一つとして分離させる。それでも、もう少し考える必要があるな。兵装については・・・・

side キラ

僕たちは今、デブリ帶での資材や、残っている燃料などを回収している。・・・

坊主！ この資材なんかを運んでくれないか？ こいつは洗えば何とか使えるかもしけん・・・それにアレの完成に使えそうな資材は少しでも持つていきたい

マードックさんの要請で僕はその機材をアークエンジュルに運ぶ。
・・デブリにこんな使えそうなものがいっぱいあるなんて・・・ジ

ヤンク屋にとつては宝庫なんじやないかな？

・・・ゴニウスフに向かつたみんなは大丈夫かな？

うつ・・・想像するだけで少し怖いな・・・たぶんあの核攻撃からあそこは時が止まっているのだろう。それはそのままの状態で死んだ人が漂つていること・・・・

いくらリオンでも大丈夫じゃないんじゃないかな・・・・

side リオン

見ていて気持ちのいいものではないな……
報告の通りにかなりの水が凍っていた。それに保存状態もいい。だが
が……

「…………ああ…………ああ…………」

「ミコアリア！！ 離れて！ 君が見るようなものじゃない！！！」
トルがあわててミリアリアの視界をふさぐ。

「これを見ると余計に罪悪感を感じるな……」

サイは目を逸らしながらつぶやく。

この海域には当たり前のように人の死体が漂っていたり、水の中で
氷漬けになつたりしている。死ぬ瞬間の時のままに……
核の爆発の余波で体がバラバラになつたり、きれいな状態で残
されていたり……

やめよう、今は……進むしかない。生きなきやいけないんだ……

ピキーンー！

これは……MS-1？ どうしてザフトがここに……？

現れたのは偵察型のジン……幸いこちらには気づかず飛び去つて
行つたが、なんだつてこんなところにいたんだ？

「まさか、ここに来ることも気づかれているのか？」

助けて・・・・・

え・・・・なんだ、女の子の・・・声？

なんで・・・こんなところで・・・・助け・・・呼んでる？

リオンは自分の体が自分でないかのような感覚に襲われ、それがなんなのか・・・それを調べたい、知りたいと感じた。

リオンはどこからともなく聞こえる声に誘われ、その方向へと向かっていく。

s i d e ムウ

「リオン君！？ みんなから離れているわよー！ どうしたの！？」

「リオン！？」

いつたいどうしたんだ！？ あいつに何が起こったんだ？

ピキーン！

リオンと同様に、ムウにも得体のしれないものが頭に響いてくる。それは助けを求める声・・・リオンの感情・・・

なんだ！？

待つていてくれ！！ 今助ける！！

ムウは突然の声と情報に頭をおさえる。・・・これはリオンの声！

? 誰を、まさかクルーの誰かが危険に・・・!?

「艦長!.. 外で作業しているメンバーは無事か!?」

「え・・!.. エエ、リオン君以外はみんな問題ないわ。・・・どうかしたの?」

マリュー艦長は突然焦り始めたムウを見て、ぽかんとしている。

「な!? ..そ、そうか・・・」

「なにか、あつたのですか?」

「いや・・・大丈夫だ。」

リオン・・・お前はいつたい何を考えているんだ? そしてさつきの声はいつたい・・・

side リオン

「やはり・・・これは民間船の残骸か・・・」

声に呼ばれるままにこの宙域にやつてきたリオンはまず無残な残骸を目にした。

そして、そこから流れる得体のしれないもの・・・それはおぞましい感情の波・・・

なんだよ、これは・・・何かが・・・やつてくる感じは・・・?

そして、声がする方向には・・・

「救命ポッド・・・・」

助けて・・・

声の主はここからか・・・

s i d e ムウ

「ひちら、ファンタム・・・すぐに帰投します・・・

「何があつたんだリオン！？ つてそれは！！」

「彼らは落し物を拾うのが好きだな・・・
バジルール少尉は呆れてもう何も言わない。

「でも、レーダーにそんなものはなかつたわよ。どうやつてあれに
気づいたのかしら？」

すみません。

あの時の不思議な感覚・・・リオンと相談してみようかな？

そして、今は格納庫に俺たちはいる。

そこにはリオンが運んできたポッドが存在している。

「じゃあ、開けますぜ？」

「ハロ ハロ、ハロー、ハロ、ラクス、ハロ。」

〈はあ？？〉

一同がぽかんとする。突然の事態・・・いや予想外の出来事に困惑
したいた。

な、なにがやつてきたんだ？ しゃべる丸い球体！？

「 ありがとう。御苦劳様です。」

続いて中からピンク色の髪の女の子がふらりと母から飛び出してきた。

「うわあ、みんなもつ趣させ出でなこよひだ。

誰だ！？

とつあえず、ラクスちゃんには何かとアンチが多く、改悪されるものがありますが、作者が意図的に改悪するのは控えようと思います。キャラに罪はないと最近感じているので・・・または、ファンが怖くてそんなことできないですね・・・でも戦争の理不尽で、キャラクターの誰かが死ぬのは不可避ですのじ了承を・・・

プラントの歌姫（前書き）

忘れ去られていたあの人が出ます。

パラノイアの歌姫

s.i.d.e ミゲル

よつやく・・・・よつやく俺のターンだ・・・

いかん、戯言を吐いてしまった。

読者の皆様は忘れてはいるかもしれないが、第2話にてファンタムのかませ犬として、『歯獲されたジンのパイロットはこの男である。

誰がかませ犬だ!!

さつきから自分でもよくわからないうことをいつているな・・・

俺の名はミゲル・アイマン黄昏の魔弾という異名を持つていたMSのパイロットだった。

まさかあんな簡単にやられちまつとはな・・・・あの時ナチュラルを侮っていた俺が恨めしい。

しかし、この艦今はどこに向かってるんだ?

s.i.d.e アスラン

アスラン・ザラは査問委員会の出席、並びに地球軍MSの説明のち、ホテルにて待機していた。

「ん?アスラン・ザラです。」

オペレータからの突然の連絡により、アスランはそれに応答する。

「認識番号285002、クルーゼ隊所属アスラン・ザラ。軍本部より通達です。」

「はっ！」

「ヴェサリウスは予定を35時間早め、明日、1800の発進となります。各員は1時間前に集合、乗艦のこと。復唱の後、通信受領の返信を。」

「ヴェサリウスは明日、1800発進。各員1時間前に集合、乗艦。アスラン・ザラ、了解しました。」

その後何気なくテレビをつけると画面から信じられない内容が報道されていた。

「この船には、今回の追悼式代表を務める、ラクス・クライン嬢も乗つており、・・・」

「ん？」

「安否が気遣われています。」

その一言で、アスランの視界が暗転しかけた。

「……な！ああ……」

「繰り返しあ伝えします。追悼一年式典の慰靈団派遣準備のため、ユニウス7へ向かっていた視察船、シルバーウィンドが、昨夜消息を絶ちました。」

「そ・・んな・・・・ラクス・・・・！」

side ムウ

「あら？ あらあら？」

ピンクの女の子は、ここが低重力下であることに慣れていないらしく、体のバランスをとれずにいた。

「ハロ？ ハロハロ？ ハロ、ラクス！ ハロハロ！」

あわててキラとリオンが女の子の手を握り、バランスを取らせる。

「大丈夫、ですか？」

「ありがとう。」

「・・・あ、いえ・・・あのあなたは・・・」

「ハロ?」

リオンが何か言おうとしたが、ボールにさえぎられてしまった。

「あらあら?まあ!これはザフトの船ではありますんのね!?

<...はあ...>

なんというか、すごい能天氣な娘だねえ・・・

「ホナナー!」

・・・類は類を呼ぶみたいで、ボールのほうも騒がしいな。それに

どこかで見たような・・・

「うはあ・・・」

横では頭を抱えるバジルール少尉がうめく。珍しい光景なので少し
あの子に感謝しようかな?

「...はあい?」

慣れてるからスルーで。

「やつてしまつたかも・・・」

リオンがこの艦に来て初めてか、頭をおさえている。というより恼
みの種が尽きないねえ・・・。

「ポットを拾つていただいて、ありがとうございました。私はラク
ス・クライインですね。」

「ハロ!ラクス、ハロー。」

「これは友達のハロです。」

「ハロハロ。オモエモナー。ハロハロ?」

「はああ・・・」

そう、ため息つかんの・・・美人が台無しだぜ・・・まあ確かに・・・

・
「・・・クライインねえ!。彼の、プラント現最高評議会議長も、シ

「ゲル・クラインといつたが・・・

ようやく思い出した。どつかで見たかは忘れていたが、かなり歌の上手い子だつたな。

「あら～？シーゲル・クラインは父ですわあ。御存知ですか？」

「…………（ここ）で吹いてしまえば殺されるな・・・・・」

「…………（なんでこう次から次へと・・・・・）」

「…………そんな方が、どうしてこんなとこに？？」

「私、ユニウスフの追悼慰靈の為の事前調査に来ておりましたの。そうしましたら、地球軍の船と、私共の船が出会つてしまつまして・・・臨検するとおっしゃるので、お請けしたのですが・・・地球軍の方々には、私共の船の目的が、どうやらお氣に障られたようで・・・些細ないさかいから、船内は酷い揉め事になつてしましましたの。そうしましたら、私は、周りの者達に、ポットで脱出をせられたのですわ。」

まったく、なんてことしゃがる・・・・民間の船まで攻撃するとは・・・

「・・・・なんてことを・・・」

「・・・・それで、貴方の船のことば（存じで？）

リオンから彼女の乗つていたとされる船については知つてゐる。彼女は知つているのだろうか？

「・・・・分かりません。あの後、地球軍の方々も、お氣を沈めて静めて下さつていれば良いのですが・・・」

やはり知らないか・・・・つらいだらうが事実を知らせなくてはならないだらうな・・・

「君を回収したのは、リオンで・・・君が乗つていたと思われる民間船は・・・残骸と化していたらしい。」

「・・・！」

真実を聞き、大きく目を見開くラクス。・・・こんなかわいい子にこんな顔をさせたのが同じ地球連合軍だから俺達が声をかけても意味はないだろ？・・・

「・・・・とりあえず、彼女には部屋を用意しましょ。救命ポッドの中での大分疲れていたでしきから・・・リオン君、キラ君！」

艦長はラクスを部屋に送り届けるために一人を呼ぶ。

「はい・・・」

「彼女を部屋に案内してあげて・・・」

「・・・・！・・・わかりました。」

「・・・・・・・」

そういってキラ達は格納庫から立ち去る。

「・・・・・」

「・・・・・本来なら私たちがするべきことだけじ、今の私たちにはそれをする資格もない。彼女の仇といえる軍に所属しているのですから・・・キラ君やフラガ大尉の弟のリオン君まで巻き込んで・・・」

「

「あいつは気にしないよ。・・・ただ、レーダーにも映つてなかつたポッドをどうやって見つけたんだろうな？　そこが一番気にならる。」

そして俺の身に起きた現象も・・・

side アスラン

「ヴェサリウス発進は、定刻通り。搭乗員は1・2番ゲートより、速やかに乗艦。」

定刻通り、俺は隊長とともにヴェサリウスに乗艦する。その途中に父上に出会った。

「アスラン。ラクス嬢のことは聞いておるつな。」

「はい。しかし隊長…まさかヴェサリウスが?」

「おいおい、冷たい男だな君は。無論我々は、彼女の捜索に向かうのさ。」

「・・・でも、まだ何かあつたと決まつたわけでは・・・民間船ですし・・・」

まだ、撃墜されたとは言い切れない。彼女は・・・

「公表はされてないが、既に捜索に向かつた、ウン・ロー隊の偵察型ジンガシルバー・ウインドの残骸を発見した。」

「なつ・・・」

シルバー・ウインド撃墜・・・アスランはまたしても目眩がした。

「ユニウスフは地球の引力に引かれ、今はデブリ帯の中にある。嫌な位置なのだよ。ガモフはアルテミスで足つきをロストしたままだし。」

捜索も兼ねて、足付きの追撃・・・

「ラクス嬢とお前が、定められた者同士ということは、プラント中が知つておる。なのに、お前の居るクルーゼ隊がここで休暇という訳にもいくまい。」

「そう・・・ですね・・・」

「・・・彼女はアイドルなんだ。頼むぞ、クルーゼ、アスラン。」

「

「　「　はー。」

「　彼女を助けてヒーローの様に戻れと言うことですか？」

「　もしくはその亡骸を号泣しながら抱いて戻れ、かな。」

「　・　・　・　！　私は・　・　・　」

あまりにストレートな言い方にショックを受けるアスラン。

「　どちらにしろ、君が行かなくては話にならないとお考えなのが、
ザラ委員長は。」

side リオン

俺達は今、ラクスさんを部屋に案内しているんだけど、

「　・　・　・　・　・　」

当然だよな・　・　乗っていた人はみんなおそらく・　・　・　・

「　・　・　・　・　・　」

気まずいな、だが、かといって俺達に何ができるか・　・　だが、気になることもある。

「　・　・　・　あの、」

「　はー？　」

「あの時、助けを求めていたのは……あなたですか？」

「え？ 確かに私は助けを求めてはいましたが、通信機器は壊れていたのでなにもできませんでしたわ。」

「……じゃああれは俺の空耳？ でも声の方向に向かつたら彼女がいた。これはどういうことだ？」

「どうかなさつたのですか？」

ラクスさんが不思議そうな目をしてきた。

「そりいえばリオン、レーダーもなしにビリヤつて彼女を見つけたの？」

キラが質問してきた。

「……みんなには黙つていてほしい。これは約束できるか？」

「ええ」

「うん、わかった。トルには……」

「あいつに言つても構わない。……単純にラクスさんの声が聞こえたんだ。」

「え？」

やつぱそんな顔をするよな……

「ここ最近それが顕著になつていてるんだ。敵の気配も動きも……レーダーを見なくとも解るんだ。不思議な感覚だ。まるで自分の体じゃないかのように……」

すごい顔をする一人。こんなことが出来れば相手の常に一手先を行くことが出来るからな。そりゃ驚くよな。

「す」「いね、それ……じゃあ姿を消しても……」

「ああ、はつきりと認識できる。」

「その力について、あなたはご存知ですか？」

「わからない。だが、コーディネーターのそれでも、ましてやナチュラルのそれとはだいぶ違う。ほんと、エスパーみたいな力だよ・・・少し戸惑つてはいるけど・・・」

「何かリスクがあるの？」

キラが俺の表情を見て尋ねてきた。

「時々、戦闘中に不快なものが入つてきたりする、なんだろう・・・よくわからないな。」

ある程度は理解しているつもりだ、あれはおそらく俺が殺した奴らの断末魔。こいつらにはそんなことを話す必要はない。むろんみんなにも、兄さんにも・・・

「その不快なものって何？」

「よくわからない。本当にわからないんだ。」

「そうですか・・・あなたがたの御名前は？」

「キラ・ヤマトです。」

「リオン・R・フラガだ。」

「助けていただき、本当にありがとうござります。」

ラクスさんが頭を下げる。

「い、いえ！ 連合が仕掛けなければ、こんな事態にはなつていませんでしたし・・・」

「それでも、あなたは私に手を差し伸べてくださいました。あなただから私の声に気づき、助けてくださったのでしょうか？」

「ねえリオン・・・素直に受け取つたら？」

キラも催促してきたか・・・

「悪かつたな、あなたを救えてよかつた。それで君の部屋なんだけど、ここだね。そしてなるべく出歩かないほうがいいかもしない」

「なぜですか？」

「ラクスさんはどうじつことなのかわからず、きょとんとする。

「みんながみんな、コーディネーターに対するいい感情を持つていからな。君に危害が加えられることは避けなければいけない」

「そうですか・・・ですが、時々会いに来てくださいませんか？」

「ああ、少し落ち着いたら、な。マードックさん達の手伝いをしないといけないし・・・」

「最後に一つだけ・・・あなた方は軍人のですか？」

「わからないな。軍に協力はしているけど、もともと民間人だからね。」

「ヘリオポリスでの事件でいろいろあって、今はこの艦に乗っています。」

「すみません。」

「ラクスさんが謝ることではありませんよ。中立なのに連合のMSを作ったオーブにも非はありますから。」

「キラがすかさずフォローする。すると、

「さん、は付けず、ラクス、と呼んでくださいませんか？」

「いきなり女の子の名前を呼ぶのはちょっと・・・まあでもこの人、芯が強そうだしな。」

「は、はい・・・ラクス・・・」

「よろしくな、ラクス。じゃあ俺達は行くから、またあとで・・・」

彼女と部屋でわかれ、俺たちはマードックさんのいる格納庫へと足を運ぶ。

side キラ

ラクスと別れた後、僕たちは格納庫で機体の整備、そして前々から考えていたI・W・S・Pの改造、マードックさん達は鹵獲したジンの改造を行っていた。

「しかし、本気ですか？ ジンを改造するなんて・・・」

ジンの魔改造は、マードックさんの提案だ。少しでも乗れる機体があれば、戦力の足しになるのではないかと考えたらしい。

「あんなに保存状態のいいジンを鹵獲できたことがラッキーだったんだ。何とか使えるんじゃないかとPsiってな。」

「とりあえず、直さないか？ まだ、デブリの中だし、動かせられるかもしれない。」

整備班の一人がとんでもなこと言つた。

「ええ！？ ・・」

「ジンを改造・・・かなり時間がかかるとPsiよ。それにマリュー

さん達は一刻も早く地球に行きたいだろつゝ・・・・

「そこは俺も艦長に提案する。俺もこんな面白ことほやつたくなつたからな。」

マードックさん・・・あと整備班のみんなからものすごいオーラを感じた。・・・」、これがメカニック魂なのー?」

その後、整備班は互いに意氣投合し、艦長たちが頭を悩ませるている。

「お前さんがいつてたI・W・S・Pの改造は、船外活動している間に一応終えたよ。レールガンは一兵装と扱われるが、それで構わないか?」

「ええ、高機動だけで十分です。これでやっとストライクはエールで出れる。」

機械は男の口マンなのかな? それにしてもすごいやる気だったね・

side トール

俺はいつたん作業を切り上げ、昼食をとるために食堂にやつてきた。ちなみにマードックさん達は爆睡中、握り飯を持ってくれと頼まれたりする。

そうなのだが・・・・

「嫌よ!」

またなんか問題起こしていいのか?

「フレイー!」

「嫌つたら嫌！」

「なんですよ。」

「どうかしたの？」

カズイに聞いてみた。

「……ん。あの女の子の食事だよ。ミリィがフレイに持つてつて、つて言つたら、フレイが嫌だつて。それで揉めてるだけさ。」

「私はヤーよー！」コーディネイターの子のところに行くなんて。怖くつて……」

「フレイ！」

サイが咎める。

「……あ！……も、もちろん、キラは別よ……それは分かつてるわ。でもあの子はザフト子でしょ？コーディネイターって、頭いいだけじゃなくて、運動神経とかも凄くいいのよ？何かあつたらどうするのよ……ねえ？」

「……ふーん」

どうでもいい話だね。

「でも、あの子はいきなり君に飛びかかつたりはしないと思つナビ・・・」

カズイがぼやく。

「……そんなの分からぬじやない！コーディネイターの能力なんて、見かけじや全然分からぬんだもの。凄く強かつたらどうするの？ねえ？」

「まあ！誰が凄く強いんですの？」

「この人か・・・リオン達が言つていたのは・・・

「ハーロー。ゲンキ！オマエモナ！」

「あつ！・・・

なんだ、これ？

「わあー・・・驚かせてしまつたのならすみません。私、喉が渇い

て・・・それに笑わないで下さいね、大分お腹も空いてしまいました。こちらは食堂ですか？なにか頂けると嬉しいのですけど・・・

「天然か？ 空気が軽くなるな。この子がやつてくると・・・」

「あの、キラ達には会ったの？」

「いえ？ ですが勝手ではありませんわ。私、ちゃんとお部屋で聞きましたのよ。出かけても良いですかー？って。それも3度も。」

「天然だ・・・間違いない。それを素でいえるのは、かわいい子の特権か？」

「それに、私はザフトではありません。ザフトは軍の名称で、正式にはゾディアック アライアンス オブ フリーダム・・・」

「な、なんだつて一緒に！ゾディネイターなんだから。」

フレイのゾディネイター嫌いもここまで来たら異常としか言えない。

「同じではありませんわ。確かに私はゾディネイターですが、軍の人間ではありませんもの。」

「『いかよくな』の子怒らないな。そこがすごいというか・・・。

「貴方も軍の方ではないのでしょうか？でしたら、私と貴方は同じですわね。御挨拶が遅れました。私は・・・」

「ちよっとやだー止めてよー」

・・・・「一デイネーターは、そんなに俺達と違うのか？ ならキラは・・・・

「冗談じゃないわ、なんで私があんたなんかと握手しなきゃなんないのよー」

ひどい・・・・そんなこと言つちや・・・・

「一デイネーターのくせに！ 驕れ駕れしくしないでー！」

「ね、ねえ、フレイツブルーコスモス？」
カズイが恐る恐る質問する。

「違うわよーーー！」

その考へがブルーコスモスだつていうんだよーーー

「でも・・・・あの人達の言つてることつて、間違つてはいないじゃない。病氣でもないのに遺伝子を操作した人間なんて、やっぱり自然の摂理に逆らつた、間違つた存在よ。」

間違い？ キラが間違いだつていうのか！？

「じゃあ今いる一デイネーターはみんな死ねばいいのかーー キラも彼女も今すぐ死ねって・・・そう言いたいのかーー」

「ト、トール？」

「そんなこと言つてないじゃない！… ほんとはみんなつてそう思つてるんでしょ？」

「・・・・・」

カズイは黙つてしまつた。しかし、

「私はそつは思えない。」

「ミコアリア？」

「私はそんなの関係ないと思つてゐる。リオン、それにトールの言つ通りよ。ただ単に人種で人を決めつけるなんて間違つてゐる。」

「な、なによ。でも気持ち悪いってあなただけ思つてゐるはずよ！…」

フレイはそれでも考へを曲げない。トールは困惑っていた。なぜこうも彼女は「コードィネーターを差別するのか・・・・

「行きましょ。えーと、」

「ラクス・クラインですね。」

「えつとあたしはミコアリア・ハウ。彼はトール・ケーニッヒよ

「部屋で食べるのか？」

「そうよ。ラクスさんの弁当、持つて行つてくれない？」

「えつ！？」でも、すでに俺もトレインを……

「持つて行つてくれない？」

「目が笑つてない！―― 目が笑つてないから――」

「うん……」

俺は、最終的にはラクスさんの分だけでなく、ミリアリアの分も持つことになった。

どうしてこうなった！？

side リオン

数日後、俺たちは、艦長から許可をもらい、デブリ帶からまた資材を集めに行くことを許された。

ムウさんが俺が兄さん用OSを作つていてこと、I・W・S・Pのことを艦長にマードックさん達整備班が頼み込んだためである。

兄さんも「これで俺はMAからMSか？」と初のナチュラルのMS乗りになれることに興味を抱いたこと、ナタルさんが珍しく興味を示したことが決め手となつた。

「よし、野郎ども！ 新たに機材もそろい、完成まであと少しだ！」

「

「おおお――――――」

整備班のボルテージはマックスで、田頃の倍に匹敵するポートンシャルを発揮していた。

完成は早くても一週間後、もしかしたら早くなるかもしれないがこれが日安だらう。

「こやあ～まさか！」まではやく進むとはなあ・・・」

兄さんは、ほとんど外装が完成しているメビウス・ゼロと同じ色で塗られたジンを見つめる。

「ゼロのせうせうじうするかな・・・MAでも愛着があるんだよねえ・・・」

「うーん、でもあの五機に対してはレールガンはあまり意味がないからな。余裕があればあれを武装として考えてみるよ。」

「そりか・・・まあ仕方ないよな。それよりあの子のところへは時々行くのか？」

「そうだね。キラヤトール、ミコアリア、時々サイも来て話をしたり、歌をきいたりしているよ。」

「なあ、俺も歌を聴きに行つてもいいか？」

「兄さんは年下が好みなの？」

「違ひつひつひの……いやあ一回でもこいから、プランクトの歌姫の歌を聞きたくてな。」

「へえ、」

にやにやすると兄さんはかなり焦りながら反論する。

「本当だつひの……・・・・・話は変わるが、お前、声が聞こえたつするか?」

突然の・・・兄さんからの信じられない言葉に俺は目を見開いてしまった。

「心配すんな。どうやら俺も何となくだが聞こえる。」

「ええ!?」

兄さんにも聞こえるのか!?

「これの正体・・・わかるか?」

「『めん、兄さん。正直俺にもわからない。でも、かなり戦闘では役に立つのは事実ですね。けど、敵の叫び声が聞こえますよ。』

「せりゃあ、困ったな・・・だが、どう役に立つんだ?」

俺は今までのことを話してみた。

話を聞いた兄さんは啞然としていた。その能力に・・・

「とんでもねえな、それ・・・まあこのことは俺達だけの秘密といつ」とで・・・

「キラとラクスにトール、ミコアリアも多分知つてゐると思ひけどな、あいつらは信用できるし、」

「そ、そつか。まあそういうことだ。歌の件、俺もいいか？」

「ラクスなら構わないと思ひ、トールたちも何も文句はないと思うよ。」

それから兄さんと俺はラクスの部屋に行き、キラ達とともに小規模なラクスのコンサー^トを聴いていたりする。

兄さんが歌だけで感動して涙流したのは意外だつたな、でもあんまりからかつたら怒られちゃつたけどね。

「でも、月基地にここの子を送らなきゃいけないんだよね・・・キラがつぶやく。

「う・・・どうすっかなあ、隠し通せたらいいんだが・・・」

今の俺達には隠し通せるだけの案が思い浮かばなかつた。

プラントの歌姫（後書き）

ミゲル なんだこれは！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5597y/>

機動戦士ガンダムSEED可能性を抱く者

2012年1月8日22時45分発行